彼が篤學の士であつたと云ふ事に就て、一つの面白い逸事が傳えられてある、卽ち彼が幼時バビロンより出て、パレステナに移住した頃、其家甚だ貧しくして彼は勞働に從事して家計を助け、傍ら生來嗜好の學問に勵んだ次第である、或時の事學校に學者の討論會ありと聞き、彼は是非之を聽聞したいと思つたが貧しき身の入場券を購ふこと能はず、左りとて思ひ止まるべくもあらねば、早速の窮策を案出して講堂の後に廻はり、窓に縋り付いて外より之れを聽て居た、內には甲論乙駁の討論いつ果つべくもなく餘程長時間に渡つたのであるが、時宛かも沍寒骨に徹する嚴冬の夜の事なりしかば、彼は何時ともなく凍へて知覺を失ひ、明方まで其儘其處で昏睡の狀態であつた、翌朝校僕が講堂掃除の際一つの窓から光線の通らないのを見て、其の窓を開いて見ると右の次第で、ヒレルが凍へて氣絕して居たと云ふ大騷ぎを演じたとの事である、彼が苦學の程察するに餘ある次第である、而して其格言集は予も曾て之れを愛讀したことがあるが、內に味ふべきことが澤山ある、就中予の記憶に殘つて今尙ほ忘れない語がある曰く

1. "If I am not for myself, who is for me?"

是れ其の第一句にして「我自ら之れを處せずんば誰れか我が爲めに之れを處する者ある」と云ふのであつて、卽ち自修の根本義を說いた言葉である、次に

2. "If I live for myself alone, what am I?"

と云ふて居る、意は前句に制限を附したる者にして、我は我の爲めに盡さねばならぬが、それを以て終局の目的とせず、自己の爲を計るは嫌て人の爲めに盡くさんが爲なる事を示した者である、卽ち「我もし己の爲めにのみ生きなば我は何する者ぞ」と云へるにて、自治の要道を示し併せて利己の精神を戒めたのである。

3. "If not now, when?"

是れ第三の句にして「今でなくば何時ぞ」と云へるにて、其意は凡て事を爲すには機會を失する事なく、今と云ふ時直に決行して明日と云はず明年と延ばさず卽刻卽時に之れを爲せと敎へたのである。

此三句は皆人生の大敎訓にして吾人の常に服膺すべきものである、予は茲に其第一句を借り來つて青年自修の必要を說うと思ふ。

第一智力の修養 (Intellectual Discipline) 識者の內には現今の我國の青年學生を以て、知

識に食傷したるが如く稱する者あれども、予を以てすれば未だ智的修養がたらないと思ふ、成程彼等は隨分勉强して居ることは事實である、然れども彼等の勉强は予が云ふ智的修養でない「チッシプリン」ではない、彼等は多く學び廣く知ることを主として、智的能力を練磨する方には大に缺く所があるのである。

是れ乍併青年學生の罪に非ずして、今日の我國の教育法が識らず〳〵青年學生を導き此弊に陷らしめたのである、今日の教育家は注入主義を廢し開發主義を採ると云ふて居れども、其の實際は矢張り注入的教育を實行して居るのである、學問の中樞なる帝國大學に於ても尙然り、教授は講義を朗讀し、生徒は之を筆記しよく之を暗誦して試驗に合格せば修學の能事了れりとして居る、其結果多數の鸚鵡學者を出たしたが、比較的實力ある人才を出すことが少ないと云ふことになつて居る、彼の學校時代の秀才にして在校中は拔群の稱を擅にし常に級中の首席を占めたる者が、往々卒業後社會に出づるに及んで更に成功の聲譽を上げず、甚だしきは轗軻不遇の人となつて當年の面影を殘さゝるに至るものあり、之れに反して在學中の成蹟甚だ美しからず、辛ふして落伍者たるを免がれたる者が、實際社會の競爭場裡に馳驅するに迫んで面目一新し、業成り名遂ぐるに至るもの畢竟其原因此弊實によるのである、卽ち前者は受働的の勉强をなして、唯教師の教ゆる所を後生大事に覺え之を忘れざることにのみ勉めたが、後者は自働的勉强法により課業を學ぶことよりも智力の練磨に重きを置たのである、之れ前者は教場の秀才と爲り、後者は社會の人才となつた譯である、而して學界に於ても實業界に於ても有爲の材となる者は常に後者に多いのである。

青年の第一箴は斯處にある、則ち Book—Reader となるのでない Hard Worker となるのである、多くの書物を讀むのが茲でない、己が智力を働かすのが要である、十冊の書物を讀よりも一篇の論文を書く方が利益である、書物を讀み講義を聽くのは勞力を要せずして出來る仕事である、之れを譬ふれば讀書は坂を下るが如く、批評や論文の起稿は嶮はしき坂を上るやうなものである。

前述の如く今日の教育制度が暗誦を奬勵し試驗を重ずる方であるから、自働的勉强に志す事は落第の汚名を蒙むる危險を冒さねばならぬ次第である、然し此の種の落第は他日社會に出でゝ成功の合格に値する者となる事は疑のない所である。

海綿は之れを多量の水に浸せば多量の水を吸收するものであるが、又水より引き上げて絞る時は吸收したる水を悉く排出して仕舞ふものである、今の「所謂」學者は恰も海綿の如く、折角學校に於て教師や書物から吸收したる學問を、社會の壓搾に出遇ひて直ちに又排出し去つて殘す所なきに至つて仕舞ふのである、斯る海綿流の學者は青年の則るべき者でない。

第二道德の脩養 (Moral Discipline) 善の爲すべきは人皆之れを知り、其善の何者たることも略ぼ之れを知る、且つ善事を爲して正義に移らんことは萬人の願ふ所である、既に此智識あり此願望あつて尙ほよく之を決行すること能はず、滔滔たる世人皆誘惑に陷り罪惡の奴隸たるは何の爲なるかと云ふに、他なし意志の力の薄弱なる爲である、人或は之を境遇の勢力に歸する者あれども、然れども其境遇の勢力に束縛せられて其願はざる不義不德の業をなすは、これ卽ち意志の薄弱なるに職由するものと云はねばならぬ。

坪內博士の說によれば、個人が惡を行ふ源因は(一)同情性の缺乏(二)倫理觀念の不明確(三)倫理觀念の不健全(四)薄志の四つにありと云ふのであるが、就中予は第四を以て重もなる原因となすものである、卽ち人生の罪惡は知識の缺乏或は誤謬より來るよりも、道德的意志の薄弱なるより生ずるものが大多數であると思ふ。

彼のセーキスピヤが描きたるハムレットの性情は尤も善く此間の消息を洩らして居る、彼は本來善人であつた、且己の爲すべき事は善く是れを知り、また之を遂行するの願望も熾烈であつた、而してその機會の屢々彼れの目前に臨みしものあるにも拘はらず每に其機を失し、遂に彼れが如き悲慘の終を告ぐるに至りしことは、全く彼の意志の力の缺乏に因らねばならぬのである。

予が舊友に憾むべき死を遂げた者がある、彼は幼時より神童と呼ばれ當世の敎育を受けて慶應義塾を卒業し、前途有望の青年として矚目せられ、其性質又溫厚篤實にして正直なる人間と稱せられて居つた、然るに彼は唯一の缺點として世の善人と稱せらるゝ人によくある意志の薄弱なりしが爲め、終に或る誘惑に陷り情實に繫がれて心に願はざる犯罪をなし、終に囚徒の群に投ぜられ獄中に病を得て不歸の人となり果なき最後を遂げた、而して世間此種の青年甚だ尠からず有爲の將來を空しくすることは惜しみても餘りある次第である。

道德的修養の道如何と云ふに、他なし日常接觸の事物に就て意志を練磨することである、例せば飲酒は青年の誡むべき惡行であると認めば、斷然酒杯を遠け假ひ如何なる事情の元に强ゐらるゝ事あるとも、之れ我擊退すべき誘惑の襲來と見做して極力之を排斥するのである、而して之れを飲酒のことのみとせば事は一些事に過ぎざる如くなれども、然も斯く勵行する事によつて精神上に良好の習慣を生じ、終に强大なる意志の力を養成し得て堅忍不拔の人となり、他日世に出でゝ事に從ふに際し、明斷水の流るゝが如き快手腕を振ふ事が出來る素養を茲に爲す者とせば、其係はる所決して尠々でないのである。

予が友人に意志の修養に篤き者がある、其人他に對して苟も我良心に歡ばざる所あるか、假ひ之れを拒否する事が如何に其人に不快の念を與ふるものありとも、又如何に不利益なる結果を齎らす事ありとも、斷じて No（否）と云ふことを修養して居るのである、これは修養を積まねば爲し得ぬことである、人の言葉に順ふは易けれど逆ふは難いものである、Yes といふは易く、No といふは難い、西人も斯く云ふて居る

Stout 'No' means a stout character; rendy 'Yes' means a weak will

第三、精神の修養（Spiritual Discipline）以上陳べ來りたる所は智力の修養、道德の修養にして、各々心の一部分の修養に過ぎざれども、此處に云ふ精神の修養は心靈全體の修養にして、精神の態度を高尙にする人間てふ自覺に關する修養を云ふのである、卽ち宗敎の本領である、世の宗敎を見る者稍もすれば其の形骸に走せて聖典儀式に重きを置くものあれども、由來宗敎の本體は神學にもあらず、儀式にもあらずして、人生に對し、宇宙に對して、謹嚴なる精神の態度を取る所に在るのである。

然れども予は決して厭世主義を歡迎する者でない、世を棄てゝ山に隱くるゝなどは以の外の事である、斯る不健全なる思想は極力之れを排斥せねばならぬ、然し吾人は時に人事を忘れ、自然に接し、本我に觸れ、沈思默考して敬虔（Reverence）の念を養ふの必要を認むる者である、此の修養なき者は偉大なる人物たることを得ず、此の精神なき國民は大國民たること能はざること、古今の歷史に徵して明らかなる事實である。

横井小楠先生の詩に、「神智靈覺湧如泉、不用作爲付自然、前世當世更後世、貫通三世對皇天」といふのがある、先生の偉大なる思想の淵源は此詩によりて察することが出

來る、精神的修養は洵に大切である、此の修養を怠る時は人間てふ自覺も竟に消滅し、人類は唯醉生夢死の一生を送るに過ぎざるものとなるのである。

現代の青年は祈禱の眞義を解せるや否や余は之れを疑ふのである、彼の世の所謂祈禱の甚だ病的なるものに嫌厭たる餘り、祈禱の語をさへ之れを輕蔑して居るのが彼等の狀態ではなからうか、然も祈禱の眞義は斯くの如き輕薄なるものにあらず、其の妙諦は瞑想の內に大靈に交はり以て之と同化するにあり、其天空濶大なる心境や正に羽化して上天する者である、予は曾て印度洋航海中洋々として際涯なき水の淼々たるを見、蒼々たる天の極まりなきを仰ぎ、感慨措く能はず偉大の感念心胸を厭し來て終に莊嚴なる祈禱を誘致された事があつたが、當時予はユーゴーの傑作"Les Misérables"を繙き左の一節を反覆して直ちに言外の妙味を掬したことであつた。

"There is an infinite without us, is there not an infinite within us?—To place the infinity here below in contact, by the medium of thought, with the infinity on high, is called praying."

ユーゴーが所謂瞑想によりて我心境の無究を、磅礴たる宇宙の無窮に接觸せしむるもの卽ち祈禱なり」と稱せる、玆に祈禱の眞諦は赫灼して居るのである、而して此祈禱は精神修養の極意にして、此處に達せずんば以て修養の奧堂に上つた者と云ふことは出來ないのである。

青年と刀劍

何事にも其道の黑人の話には傾聽に値する者がある、予嘗て刀劍の道に精通する某氏の談を聞ゐて非常に興味を起したことがあつた、予は原來刀劍の事に就ては知識の乏しきものであるから、識者に取つては左迄の珍談にあらざるべき事迄も、非常に面白く感じたれば從つて謹聽した次第である、而して談愈々佳境に進んで妙趣の倍々掬すべきものあるを感じた、就中其鑑定法を聞くに至つて、思はず案を打つて之れなるかな青年修養の要訣、此にも善く顯揚せられたりと感嘆措く能はざる者があつた、說者曰く名刀は(一)善く斬ること、(二)曲らざること、(三)折れざること、(四)品位あること、(五)疵なきこと、此五要件を完備せざるべからずと、之れ皆有爲の青年の具有せざるを得ざる資格にして、其完備するものに於て理想的青年を見るので

ある、左に其細目に亙りて之れを說かん。

(一)善く斬ること　往年陸奥宗光伯は剃刀大臣の稱を得た、蓋し善く切れる謂である、名刀の善く斬れざるべからざるは論する迄もなく其最大要件なり、青年亦善く切れざる可らず、而して青年の善く切れるは其實力を意味するなり、斬れざる刀の鈍刀と擯けられて徒らに無用の長物たるは、實力なき青年の終に無用の人物了する所以にして、實力養成は有爲の青年の第一要素である、青年の實力養成に全力を傾倒せざるべからざる所以は實に茲に存す、然るに今日の敎育制度を見るに、茲に大なる缺點を有し、徒らに藝術敎育の末に走つて人物敎育の本を忘れて居る傾向が明らかに見られる、斯くて有爲の資は空しく開發せられずして、實力煥發の機を失する者比々皆然らんとして居る、又予は同窓の學生にして在校中は同一の學業を修め同一の敎育を受けたるものゝ、卒業後社會に出づるに及んで其成敗雲泥の相違を來たし、一は利達の榮華に飽き、一は糊口の道にも窮するものあるを見るが、之れ等は全く其實力養成の用意の周到なりしと、疎漫なりしとに由るものにして、學藝の成績に由らぬものであると思ふ、之れ在學中は優等生を以て全級の羨望を荷ひ、敎師も亦其將來に矚目して居たものが、卒業後の成績一向振はずして往々同輩の後に撞著たる者ある所以である、「アビリチー」は有爲の源である。

(二)曲がらざること　善く斬る刀も曲がる樣では名刀でない、青年も實力あつても節義なく、名利の爲めに主義を曲ぐる樣では有爲の青年と云ふ事は出來ぬ、卽ち刀の曲らざる如く、青年には不拔の主義の養成を要するのである、彼の刀の曲がるは地金の鍛錬足らずして、質堅きを致さざるが爲なり、青年の節義を破り利達に趨るは、意志剛堅を缺き、主義確立せざるが爲なり、之れ世に敏腕の人ありて硬直の士に乏しき所以である、予は彼の利口なる青年等が利によつて行動を二三にし、巧に世に處して名を爲すものあるを見る每に唾棄の感を催ふすのである、而して世間此唾棄に値する俗化性に富める青年の多きを見て、嘆息の外ないのである。

(三)折れざること　鍛冶宜しきを得て身硬く、適れ名刀曲らざること請合なれども此種の刀劍には間々折れる者がある相であるが、斯くては又名刀たるを得ぬのである、名刀は曲がらざる上に折れざるなり、青年も亦然り、意志剛堅にして、主義確立の修養を得たる者も、時に尙堅忍不拔の精神を缺き、意外の珍事に脆くも挫折し

終る者あり、之れ青年修養の一大事件にして忍耐の要茲に存す、若し夫れ劍戟相接して火花を散らすに際し、我刀折るれば生命は敵刄の一閃の下に終るのである、實に恐るべき次第にして其昔勇士が名刀を求めて千萬金にも代へたのは至當の譯である、又工匠が鍛冶に全心を込めて鋼鐵を精錬したのも之れが爲めである、社會の實戰に適れ實力あり主義ある青年にして忍耐を缺けるが爲めに、功を一簣に缺き、一敗地に塗れて復起たざる者あるは所謂脆くも刀折れたるなり、忽ち失望落膽自棄自暴して終に華嚴に走り淺間に行く者、皆其類の青年にして眞に惜むべく又同情すべきである。

予曾て米人に向つて日本青年の理想と題し、不倒翁を示して其七轉八起して終に倒れざる者あることを語つたが、予は眞實に我青年に向つて彼の不倒翁を以て任じ、何處迄も屈せざる底の氣慨を養成せんことを希望するのである。

(四)品位あること　刀劍の品位は尙達人の風采の如く、何處となく落付あり、何處にも卑しき所なく、一見して快感を覩る者に與ふるのである、此刀劍の品位は鑑定上尤も注意すべき點であつて、如何なる業物でも、鍛冶に精神を籠めたるものでも、此品位のないものは名刀と稱することは出來なゐとの事である、青年も亦然り實力あり、主義あり、忍耐あるものにても氣品を缺いては理想的青年と稱することは出來ぬ、卽ち崇高なる人格は青年修養の最高なる要件である、予の知人に敎育あり、主義あり、忍耐ある人で一向成功しない人があるが、其缺くる所其人の品位にあつて人物頗る野卑である、之れは大に天性にもよることであるが、勉めて止まざれば修養終に天禀に勝つの日は來るのである。

(五)疵なきこと　惜むべし此名刀にして此瑕瑾なくんばと云ふ事は屢々鑑定家の口より洩るゝ嘆聲である相であるが、我青年に於ても一點の醜行の爲めに有爲の資を全滅せしむる者間々吾人の見聞する所にして、操行の修まらざる事は聯城の珠の瑕である、洋々たる前途の發展も之れが爲めに閉塞されて仕舞ふのである、人若し一世に時めきたる人士が一朝醜聞を世に洩らすに迨んで、前日の盛名を貶し忽ち日蔭者となりて、終生浮まざる悲境に陷りたる活例に徵せば、懼れても尙戒むべきは操行の修まらぬ事である。

予が家の祕藏の刀に兼元の作あり、流石に名匠の丹精を凝らして打上げたる程あ

つて、前條の五資格を具へたる名刀であるから、予は近頃予が家を訪ふ青年には必らず之れを示して、彼の說者の言を添へて以て奬勵の資に供して居る次第である、說者更らに語を進めて刀鍛冶の事を語るに及んで、之れを今日の敎育者の上に比して予は更らに趣味深く感じた、曰く鍛冶は其腕によつて普通の地金を以て名刀を鍛え上るので、地金に仕慣けもなければ特別品のあるでもない、所謂腕の冴えが名刀の世に出づる所以であると、今の敎育者は果して此名匠の腕を有し居る乎、予は之れを疑ふのである、若し今後の敎育界が吾人の希望するが如き有爲の青年を輩出する者なくば、予は當路者が人物陶冶の手腕の遠く彼の名匠に及ばざる者あるに歸せんとする者である。

說者又曰く鍛冶に本場あり、或は大和物、或は備前物、或は相模物等出所によりて互に其特長を發揮して居る、假令ば關の作は斬るゝが柔かいとか長船の作は曲らざるが重いとか、一長一短を其間に見ると、予は思ふ敎育にも亦本場がある卽ち系統があつて、或は官學と云ひ或は私學と云ひ其間互に長短を示して居るのである、又私學の中にも系統あつて其輩出の人物に特異の感化を及ぼして居る、假令へば慶應義塾出身者は福澤主義の經世的にして功利に傾ける、同志社出身者(但し初期の)は新島主義の精神的にして偏狹に傾ける等、各特殊の學風を示して居るのである。

予は今日の敎育界を見て其大缺點は正宗其人を缺くにありと信じて居る、當年の敎育は重きを人に置いたが、今日の敎育は重きを機關に置ゐて居る、之れ人物の出でざる所以である、然れども予は今後の社會に於て、昔の如く英雄崇拜は行はるゝものとは思はぬ、又一世を風靡する底の大偉人をも期待せぬ、蓋し英雄崇拜とか偉人の出現とか稱する事は、之れは敎育の普通せざる社會に於て、人智の開發に非常なる懸隔の生じたる時弊の結果にして、知識の分配今日の如く公平にして、從つて貧愚の差甚だしからざる世にあつては、昔の如く巍然として卓立する大人物の現出することは先づ以てなかるべしと思ふ、故に予は我敎育界に向つて偉人の出現を要求せざれども、有爲の人物の輩出に至つては飽迄之れを望まざるを得ぬのである、而して之れ予が人格養成の最高理想を標榜せる宗敎を尊重し、之れに向つて特に此期待を繫いて居る所以である。

婦人の特性と其事業

男子には男子の特性あり、女子には女子の特性あることは論なき事である、然れども其特質特性の何たるかは未だ研究問題である、而して此問題は半ば生理學の問題にして半ばゝ心理學の問題である、故に英のヘブロックエリスは重に生理の方面より之を論じ、獨のシャフルは之を心理の方面より研究した、而して此問題は更に社會學上の極めて重要なる問題にして、婦人問題と社會問題とは密接の關係がある、故に近世社會學の泰斗として有名なる米國のレスター、エフ、ワードは其名著「ダイナミック、ソシオロヂー」に於て、社會學の立場より大に此問題を論じ、統計により婦人の特質を示して居る、予も近時大に此問題に趣味を有し、聊か研究したる所あれば、就中茲には予が見て以て女子の特性とする所を擧げ、併せて近代教育を受けたる女子が將來當るべき社會事業の一二に說き及ぼさうと思ふのである。

第一、精密 (Attentive Power)　婦人の特長として第一に指を屈すべきものは精密てふことである、男子は大事を成さんことを欲し、女子は小事に忠ならんことを願ふ、於茲男子の行動は動もすれば粗雜に流れ、事半にして思はぬ缺陷を生じ終に失敗に終ることがある、是れ男子の短所である、女子に於ては然らず、凡そ事に臨めば細心翼々として叮嚀親切を極め、一小些事と雖ども之に全心を込め全力を注ぐの性質を具ふ、卽ち精密なる觀察精密なる注意は女子の特長である、之を家庭に於ける婦人の働きに見るも明らかである、日々小さき一家の內に閉ぢ籠り、食事の世話や子供の監督などをなして一生を送つて居る有樣は、之を男子の目より見れば實に憐むべき生涯の如く思はれ、苟も「アムビーション」あるものゝ一日も忍び得ないものゝ如く見ゆるが、然れども女子は此間にあつて尙盆栽家が花卉を樂しむ如く「ホーム」を樂しみ、孜々として之を經營するのである、善く一家を治め完全に子女を養育して理想的なる樂しき家庭を作らんとは之れ女子が中心よりの希望である、而して此事たる小事に似たれども易々の業にあらず、微細にして精密なる注意力に富む女子の手を待つて始めて成就する事を得るのである、左れば家庭に於ける女子の生涯を見て無爲なりとする者の如きは未だ女子の此特長を知らざる者である。

女子の特長斯くの如しとすれば、今後社會が婦人に托すべき事業として、國民教育

の任を負はしむることは蓋し適當の事ならん、即ち幼稚園を始め小學校教育は漸次之を男子の手より移して、女子に讓るの遙かに好成績を收め得べきは推測に難からざる所にして、慥に男子よりも女子に適する事業である、故に歐米の小學教育は多く之を女子の手に委ねられ、其教師は多く婦人を採用して居るのである、但し校長の位置は西洋に於ても尙ほ多く男子を用ひて居る、蓋し一校の經濟を管理し又教育の方針を指導する如き、學校全體に係はる總括的の事務は、男子の手腕に俟つ方安固なる者あればなり、然も實際教場に臨み、兒童に接して親切叮嚀に業を授くるの技に至つては、到底男子の及ばざる美妙の點の存するのである、數年前市內小學教員會議を催ふされし際、一教員は小學教員體格檢査の議を提題したが、今日の市內小學教員にして肺患に冒かされ居らざるもの殆んどなからんとする現狀に察して若し之れを勵行する事とならば、由々しき結果を見るに至らんとの理由の下に、此議は途に撤回せらるゝ事となりたりしと、若し此新聞紙の報道を以て事實とせば、實に看過すべからざることである、假りに之れを事實と見做して其源因を繹ぬれば、其一理由は彼等の俸給額低くして生計困難のため、識らず〳〵營養不足に陷りたる結果と云はねばならぬ、去ればとて今俄かに其俸給を增すことは市の經濟の許さゞる所であろう、然らば此際如何にして之れが救濟の策を立つべきかと云ふに、予は此點よりするも漸次男教員を解雇し、之れに代ふるに女教員を以てせば善く此間の難問題を解決し能ふことと思ふ。

要するに衞生の上より云ふも、經濟の上より云ふも、將又た教育の本領の上より云ふも、今後我國の國民教育は女子の手に委するを以て良策とするのである、是れ予が女子の特性より推して、女子が將來突進すべき一方の活路となす所以である。

第二、摸倣 (Imitative Power) 精密に次で女子の特長は摸倣の才力である、男子には創意の能力强く、女子には摸倣の能力强し、是れ天の配合にして兩者孰れも貴ぶべき能力である、女子は天性美を愛するが故に、美術は女子の特長なるが如く思はるれども、是れとて唯其摸倣的方面に於て長するので、一概には評し去り難けれども創作の方面には明に劣る所があるのである、之れ歷史の事實にして古來繪畫に於ても彫刻に於ても音樂に於ても又詩歌文章に於ても、其名の傳はる者概ね男子にして女子は極めて少數である、女子は美を感受するの力あれども美を造り出すの力

に乏しいのである、殆んど婦人獨占の舞臺なる裁縫割烹の術にしても、其大家と稱せらるゝ者は皆男子にして女子でない、裁縫庖厨の事にして尙然り、其他何事にても新機軸を出し新發明をなす者は殆んど皆男子にして女子にはないのである、美術界に於て唯り女子の男子に優る所は演劇である、ビーヤール、ルーセルは「名優は平均女子に多し」と云ふて居る、日本でこそ名優と云へば、團十郎なり菊五郎なり皆男子なれども、是は當時我國の劇界に婦人を容れなかつた結果であつて、其昔にはお國歌舞伎の名は存して彼女は正に劇界の明星であつた、故に古今を通じ世界の演劇史を調査せば、劇壇に於てのみ女子は男子に優つて多くの名優を輩出したのである、而して之れ偶々女子が摸倣の才能の方面に於てのみ男子に優る所以を一層明白に表示したるものとなつて居る、蓋し演劇の本領は摸倣にあつて、其成功の祕訣は摸倣的天才にあるからである、女子が劇界に雄飛するもの大に理由あつて然るなり。

予は男女の學校に奉職して語學を敎授するものなるが、語學に於ける女生の進步は男生よりも遙に速である、學理の理解に於て男生徒に及ばざる女子は、語學の習熟に於て男生徒より優つて居るのである、是れ亦女子の摸倣的才能の男子に比して長ずる所あるに因るのであつて、語學も演劇も共に其本領摸倣にあれば之に熟達する祕訣は摸倣的才能に由らねばならぬのである、左れば「イミテーション」に拙なき者は到底外國語を甘く眞似ることは出來ないのである、故に予は茲に亦婦人が將來に發展すべき道があると思ふ、則ち予は今後我國の女子敎育に於て一層語學の方面に力を注ぎ、大に其天禀を開發して續々之れが上達を期し、終に其の天職を自覺せしめんとするものにして、此の點より女子外國語學校の新設を期待して居るものである、斯くて女子の語學の知識大に進めば、茲に語學敎授の事業を女子の手に委するととして斯學の進步は大に見るべきものあるに至らんと思ふ、故に予は平素語學の敎師には假令ひ男學校に於ても西洋人を要する場合には西洋婦人を備ふの利益ある事を信する者である、懇切なる其の敎授の技倆に加ふるに、此才能を以てす、到底男子の及ばざる所なる事は炳乎として火を視るよりも明である、今や敎育ある幾千萬の女子は陸續として學校を卒へて社會に出でつゝあるが、悉く家庭の人たるにあらずして中には多數の求職者もある事ならん、然らば苟も

女子に適當なる事業あらは、大膽に女子をして之れに當らしめ宜に適して功を奏する事は、爲政者の手腕を表明する所以であると思ふ、然らずして徒らに女子に藝術を授くるは、人生讀書の人たる勿れの嘆を深からしむるのみである。

第三、同情（Sympathetic Power）更に進んで女子の特長を云はゞ同情の念に富めることにして、「テンダー、エモーション」は女子の特質である、悲しむ者と共に悲み喜ぶ者に共に喜ぶは女子の普通性である、是は多く説明するに及ばぬ事實にして、歐米の慈善事業が多く女子の手に依て起され、彼等の纖手によつて經營さるゝのは畢竟之に由るのである、予曾て「米國に於ける婦人の事業」と題する書物を讀んだが、流石に女子教育の盛なる國丈あつて、米國の婦人はあらゆる社會の各方面に活動して居る、惡く云はゞ米國婦人は男子優りであつて、男子のする事は女子も亦必ず之をなし得る者として、年々歳々男子の領分を冒かし終に之れを驅逐せずんば已まざる勢を示し、或は文學に或は醫術に我は新聞雜誌記者に或は法律家に政治家に宗教家に其他一切の事業に今や激甚なる競爭を男子と試みて居るのである、併し予を以てすれば斯くの如きは却て女子の特長を沒するものにして、各々其天性に應じて社會の事業を分擔するこそ社會進歩の上に於ても必要の事ならんと思ふ、之れ米國婦人の事業中最も成功して天下の耳目を惹けるものは、矢張慈善事業にして他に見るべきものなき理由であると思ふ、左れば予は我國の教育ある女子も亦今後盛に各種の慈善事業に從事し、若しくは之れに贊同して鰥寡孤獨を始め世の困窮を救濟する事業に當らんことを希望して止まないのである。

以上は唯婦人の特性に見て、將來適當なる事業に之れを應用せん事を論じたるものにして、目下女子教育の趨勢に鑑み正に應急の方策とする所である、兎に角當局者は(一)女子特有の天性を發揮し(二)之れに適當なる事業を供給し(三)而して女子をして將來社會の要素たらしめんことに誠實なる注意を注がん事を希望して已まぬのである。

予の宗教的抱負

基督曰く「父の外に子を知る者なし」と、今日聖書の高等批評學の見地から觀る時は、聖書の中に「耶蘇曰けるは」と書いてある語にても、果して實際耶蘇の口より出た語

なるか然らざるか解らないものゝないでもない、然しながら此「父の外に子を知る者なし」の一言は、確かに彼れの言ひし所に相違ないと思ふ、路加傳には「父の外に子を誰なると識る者なし」とあり、約翰傳にもこれに似た言葉がある、又た當時耶蘇の位置境遇から考へても此語が彼れの口より出し事は最も自然なことゝ思ふ、耶蘇は已に大悟道に入り、大使命を自覺して世に顯はれ、凡ての「律令と豫言者」の教をも超越する大思想、大宗教を唱道し、諄々乎として其道を宣べ賜ひしに、世は頑迷にして耶蘇の志を知らず、其教を誤解したのである、當時彼れは曰く、

我この世を何に譬んや、童子街に座し其侶を呼びて、我等笛ふけども爾等をどらず、哀をすれども爾等胸うたずと云ふに似たり、蓋ヨハネ來りて食ふこと飲むことをせざれば、鬼につかれたる者なりと人々言へり、人の子來りて食ふことをし飲むことをすれば、又食を嗜み酒を好む人、稅吏罪ある者の友なりと云ふ、然れども智慧は智慧の子に義とせらるゝなり、

と、この語によりて、當時世間が如何に耶蘇を誤解して居つたかと云ふことが解る、其處で耶蘇は長大息して斯くは「父の外に我を知る者なし」と嘆かれたのである、凡そ耶蘇ほど人に誤解された人はない、偉人豪傑は其思想の偉大なるだけ、又時代の思想に超越せるだけ、時の人々に誤解せらるゝものにして、就中耶蘇の如きは甚だしく誤解せられたる偉人である、彼れの在世中は殆んど一人も彼れを識る者なく Friend of no man とは實に彼れのことであつた、伊藤公も誤解の爲に暗殺せられた、是れ公の横死を聞いて天下均しく公に同情の涙を注いだ所以である、耶蘇もまた誤解を受け恰んど國民怨府の中心となつて、遂に十字架上に磔殺せらるゝに到つた、此の大偉人、此の大賢人、我等は彼を「神の生み賜へる唯獨り子」として尊崇しても尚ほ足らざるを覺ふる此の大聖人を、無殘にも虐殺したる猶太國民の凶暴恰んど言語に絶して當時の事想像だも及ばざる所である、恐るべきは誤解なる哉、耶蘇は全く時の猶太人に誤解せられて、彼の如き最後を遂げたのである、耶蘇の選び賜いし十數人の弟子達は流石少しは彼れの心を識り、時々世人の耳に入らざる耶蘇の教を解し得たが、其時毎に耶蘇大に悅びて、

「天地の主なる父よ、此事を智者達者に隱くして赤子に顯し賜ふを謝す、父よ然りそれ此の如きは聖旨に適へるなり」(馬太十一〇二十五)

と天に感謝せられた、然し此等の使徒等に於ても尙充分に師の心底を窺ふこと能はず、解つた樣なこともあつたが、解らぬことも多く、中には全く耶蘇の目的理想を誤解して居つた者もあつて、耶蘇の死後に至つて漸く心顏の帕子を拂つて彼を見、彼を識り其敎を解するに到つたのである、嗚呼實に耶蘇が「父の外に我を識る者なし」と嘆せられた其心事は察するに尙ほ餘りあるのである

さて爰に予は世人に問はんとすることがある、則ち耶蘇の誤解せられたのは、唯昔時の猶太人にのみ限られて、今日の人は皆能く彼れの心を識り得た者であるか、彼れの人物、彼れの思想、彼れの優美なる感情、彼れの雄大なる理想、彼れの高潔にして尊大なる宗敎的自覺等、凡て眞の歷史的耶蘇の心は果して今日の世界に了解され居るや否やと、之れを外面より觀ずれば今日基督敎は世界萬國に普及して幾百千萬の信徒を有し、如何なる煙烟毒雨の蠻地にも宣敎師の到らざも所なく、特に歐米諸國は基督敎國と誇稱し、基督の敎旨は恰んど總ての人類に知られたる者の如く、毎日曜日は安息日と稱して基督の名によつて業務を休みて禮拜を事とし、地球の表面に於て彼れの名は恰んど同時に一齊に讃美せられ、其の名に依つて說敎し、其の名に依つて慈善をなされて居るが、然れども基督もし現代に現れ賜はゞ

我れ曾て汝等を知らず、惡をなす者よ我を離れ去れ（馬太七〇二十三）

と罵倒し賜はざることなきか、今日の「所謂」基督敎會ほど基督を誤解し居る者はないと予は極言するを憚らないのである、基督は往時に於て同胞の間に誤解せられたのみならず、今日吾人の間に於ても更に大に誤解せられて居る、而して最も彼を誤解して居る者は彼れの名を戴く歐米の基督敎會である、予曾て米國漫遊中熱心なる「クリスチャン」にして、堂々たる一敎會の說敎者が「三位一體、基督の神性、人間の原罪、保羅の贖罪說、聖書の無誤」謬論は、皆基督敎の生命にして其中一を疑ふ者は最も危險なる信者、否惡魔の使者である」と說いて居るのを聞た事がある、何たる妄說ぞや、予は斷じて云ふ、基督自身は此等の敎義の一ッだに敎へ賜ひしことなく、且恐らく夢想だもし賜ひしことなかつたと、勿論これは最も頑迷にして極端なる保守黨の議論に相違ない、今日の進步したる基督敎徒にして斯る愚論愚說を口にする者はあるまいが、基督を崇拜する者にして全然基督を誤解する者あることは之を以ても知ることが出來る、識見高き歷史家の言に「基督ほど世に其名を知られた人なく、

而して基督ほど世に其心を知られない人はない」とあるが、是れ實に穿ち得たる批評ではないか。

予が宗教的抱負は、實に此基督の誤解を解き、彼れの眞人物、眞思想を世に紹介せんと期するのである、抑も基督は猶太人にして歐羅巴人にあらず、東洋人にして西洋人でない、我等東洋人は最も能く彼れの心を解することが出來るのである、西洋人の習慣と思想によつて基督を解せんとするとは極めて難事に屬せねばならぬ、是れ歐米人間に基督の誤解せらるゝ所以である、前年我渡米實業團がシカゴ滯在中、或日曜日相携へて會堂に出席した時、有名なる説教家ゴンソーラス氏は得意の雄辯を振つて、基督の教の眞意義は東洋の思想習慣を通じて始めて了解し得るのである、西洋の物質的、説明的なる心を以ては之を捕ふることは出來ない、基督教は東洋の賜物にして、其美麗なる福音は東洋人の幽玄にして詩的なる「マインド」によつてのみ、解釋し得らるゝものであるとの主旨を述べたと云ふ事であるが、一場の媚言にあらず、さすがゴンソーラスにして其着想斯く面白く、識見斯く高きを示した事と吾人は密に敬服して居るのである、今後吾人は眞に基督を研究して其眞思想を飜譯し、「東洋の光」を世界に紹介するの任を果たさねばならないのである、然るに日本現時の各派基督教會は皆輸入的基督教を奉じ、其崇拜する基督は西洋式の基督にして、西洋思想を加味し、西洋人に歸化した者である、實に奇現象にして誤りも甚だしいのである、吾人の基督は正に猶太人なる基督、即ち歴史的眞人物ならざるべからず、而して其思想を味ひ、其主義を主張し、其理想を實現して之を我同胞の間に唱導し、併せて歐米人の間にも紹介し、東洋と西洋の文明を調和して世界に神の王國を樹立する事を以て吾人の抱負とせねばならぬのである。

予が未來觀

余が現今の未來觀は六回の變遷を經て成立したのである以下に其徑路を記述する。

第一自然的靈魂不朽説(Natural Immortality)　これ最初に予が心に敎へられたる未來觀にして、即ち佛敎の地獄極樂説である、此説によれば凡て善をなす者は極樂に行きて無上の幸福に飽き、惡をなす者は地獄に投せられて永遠の苦境に沈むと云ふ

のである、而して此未來觀は凡の宗教に共通する所にして、其形式こそ異なれ苟も宗教として世に現はれたるものには必ず之に類する未來說のない者はない、特に幼稚なる宗教に於ては一層露骨に此思想が表明せられて人心の機微に投じて居るものがある、斯く此未來觀が凡ての宗教に共通する所を見れば、其人類自然の要求より胚胎し來つたものにして、一二者の方便的に構成したものでない事は明らかである、故に予は之を稱して自然的靈魂不朽說(ナチユラル、インモルタリチー)と稱するのである。

予は幼少の時既に此說を聽き子供心に之を信じ、地獄に對しては非常なる恐怖心を抱き、假初にも僞を云へば地獄に於て鬼のため舌を拔かるゝ事と信じ、斯くて此觀念が一種の道德的勢力となつて居つたことを記憶して居るのである。

第二、福音主義靈魂不朽說(Evangelical Immortality) 然るに靑年時代となり多少思考力の增進するに從い、斯る未來說は餘りに幼稚にして、所謂昔話同樣に感せられ未來の實在をさへ疑ふに至つた、否未來の實在を疑ふといふよりも寧ろ死後のことは解す可らざるものとして、孔子の所謂生を知らず焉んぞ死を知らむやで、死後の事など信ずるは道理を辨へざる愚民の所作なりとして之を輕蔑するに至り、且終には之れを口にするだに耻づるに至つた。

然るに明治十二年の頃、始めて橫濱に於て基督敎を聽き、宗敎的趣味を惹起し、遂に神の存在を信じ、又た基督敎を信ずるに至り、爰に予が思想は根底より一變するに至つた。

爾來數年間基督敎主義の學校に於て敎育を受け大に基督敎の感化を蒙つて、凡そ基督敎の敎ゆる所は皆悉く眞理なりとして信奉するに至つた。

爰に於て予が未來觀も亦一變化を呈することゝなつた、卽ち基督敎の未來觀を信じて、死後凡ての人は神の台前に立つて其審判を受け、基督を信ずる者は救はれて天國に行きて永生を得、基督を信ぜざる者は皆地獄の火に投げ入れられて永遠の苦を受くるものと信ずるに至つた、而して予は之を眞面目に信じ、又た之を眞面目に傳へて一人にても多く此救の道に入れん事を努めたものである、蓋し基督敎の特色は救の福音にして、人類は皆罪を犯して亡滅に行く運命を有すれども、基督の贖罪を信ずる者は救はれて永遠の生命を享くべき者なる事を信じたからであつ

た、之れ則ち福音主義（ユバンゼリカル）の未來觀である。

此信仰は使徒保羅の時代より今日に至るまで基督教界の强大なる勢力にして、此信仰を外にして基督教なるものなしと云ふ者さへある位である。

米國に「キングトム」といふ新聞がある、此新聞は米國に於て此種の信仰の機關新聞にして、其報告には實に驚くべきものがある、年々幾百萬の寄附金は此教義の傳道費として集り世界到る處に宣教して居るが、皆此福音を傳へて人の靈魂を救はんとするのである。

第三、試練的靈魂不朽說（Probational Immortality）　福音主義の未來觀を信じて居る內、不圖予が心に一つの疑惑を生じた、卽ち此福音主義の救の教義が眞理にして、基督の福音を信ずる者は救はれ、之を信せざる者は皆滅亡に入るとせば、開闢の昔より今日に至るまで基督の福音を聞かずして死せし世界の人類は、善惡の別なく皆亡滅に陷るべき筈である、果して然らば他の事は問ずとするも、予が親愛する父母及び凡ての祖先は、皆基督教を聞かずして死せし者なるが故に地獄に投せられた譯となる、假に暫く教義の本意の頗る不公平なるものあるを看過すとするも、尙情誼上兩親地獄にありて我獨り天國に上るも果して何の幸福あるべきぞ。

當時予は基督教を信ずる信仰深かりければ、其丈此問題が予の爲め煩悶の種となり、常に宣教師或は先輩に就て之を質したるも滿足なる解答を得ず、苦悶の餘り夜を徹して眠の成らざりし事も屢々あつた。

恰も其頃米國の神學者間にも此問題起り、アンドヴハー神學校よりプロベーション、セオリ！なる新學說唱道せられて一時喧騷を極めた事があつた、其說に依れば基督を知らざる凡ての人の靈が、亡びに陷るとは餘り神に於て殘酷なる御處分である故に、必ず未來に於て試驗の機會あつて、凡て基督を知らずして死せし者は未來に於て福音をきかせらるゝ事となり、其上之を信ずる者は救はれ、信せざる者は亡びに陷るものと決せらるると云ふのである、而して此說は米國に於て殆ど異端說として一般教會から排斥せられたのであるが、予は之を以て最も合理的の信仰と思ひ、兎に角日頃の煩悶を遺憾なく解釋せられたるが故に遂に此說を奉ずるに至り、且更に深く此說を研究せんが爲めに、其主唱たるアンドヴハー神學校に入り、四ケ年の星霜を研學のために費やしたのである。

第四、萬人靈魂不朽說(Universal Immortality)　然るに更に自由討究の精神旺盛を極むるに至つて、種々の疑問續發し來りたるが、就中神は愛なりてふ基督敎の根本思想と、永遠の地獄てふ思想とは、到底矛盾の譏を免かれざる事を認むるに至つた、則ち至愛なる神が其御心を以て人間を地獄に投じ、之を永遠に苦しめ賜ふとは到底信ずることが出來なくなつた、神若し至愛にましまさば凡ての人を救ひ賜ふこそ其御心なれ、一人の人の靈をも之を永遠の苦痛に置き玉はざるこそ其攝理の祕義であらねばならぬ。と思ふに至つた、而して此思想は宇宙神敎の起源にして、「ユニボルサルサルベーション」の福音は此敎理の上に建立せられたのである、予は宇宙神敎者とはならなかつたが、未來觀に就ては彼等の說を可とし、從來の狹隘なる福音主義未來觀よりも亦アンドヴハーの新未來觀よりも、遙に之を以て合理的と認むるに至つた、彼の同仁敎會のケルン博士は此敎義の熱心なる宣傳者にして、同氏の宣言する所によれば彼が日本に齎し來れる福音は「地獄なし」てふことである。

第五、現世的靈魂不朽說(Social Immortality)　次で予が是認するに至つた未來觀は「ソシャルイムモルタリチー」とでも稱すべき者にして、卽ち現世的靈魂不朽說の極めて高尙にして美妙なる、極めて確實にして偉大なる點を敬重するに至つたのである、而して予に此思想を與へたる者は英國の小說家ヂョーヂエリオットと以太利の偉人ジョウゼフ、マヂニーとであつた、個人に生死あり、社會に盛衰あり、國家に興亡ありと雖ども、此間にありて永遠に死せず倫びざるものは人類にして、實に不可思議なる存在者である、此人類は個人や國家社會の興敗存亡に係はらず、常に生き常に成長し常に進步して嘗て寸尺も退步せざるものにして、吾人の思想、感情、行動は其精神となり、感化となりて永く此人類の中に生存すとなすもの此信仰である。アデンスは亡ぶるもソクラチスは亡びず、プラトーン、アリストーテルは皆尙生きて働けり、彼等の精神は今日の文明世界を造つた一大原因である、死者の靈は蒼天に上らずして現世に活動し、宇宙の內に消滅せずして社會進步の事蹟の上に顯現して居るのである。個人は一代にして逝く、然れども人類は永遠に活く、個人の靈魂は人類中の一分子にして、尙物質原素の如く永遠に存在すと。

以上は卽ち現世的靈魂不朽說の綱概にして、勢力不滅てふ物理學上の原則に適いて最も確實なる態度を示し、且從來の敎說より一機軸を出して、徒らに未來の祝福

を願ふが如き卑俗の思想を脱し、犠牲的獻身的なる道德の理想に合致する所があるのである。

第六、進化的靈魂不朽說(Evolutionary Immortality)　余は今日も尙ほ現世的靈魂不朽說に依りて大なるインスピレーションを得、人生に對する理想を決定せるものなれども、然も予が衷心の宗敎的要求は未だ此說を以て滿足せしむることが出來ないのである、吾人の靈魂は精神として感化として、子々孫々に亙りて永遠に人類の中に生存するといふ事は、彼の物質原素が物體の榮枯につれて新陳代謝すれども、永久に循環して決して滅亡せずと云ふ如く、理に於て誠に面白き說なれども、其漠然として個性を沒したる點は、予が宗敎的意識の要求に合致し能はざる者があるのである、於茲予は果して死後に於て自覺を有して存在し得る者なりや否やの疑問を發せざるを得ないのである、

予は未來の存否に關する觀念は、自己の道德に何等の影響を與へずと思ふ、未來あるが爲めに善行を勵み、未來なければ無責任なる言動を敢てするなどは、倫理觀念を無視したる言語同斷の沙汰にして、吾人の思想し得ざる所である、故に靈魂不朽は予に於て道德問題と沒交渉である、然れども宗敎的意識は終に永生を要求して已まないものなるが故に、神を信ずると同時に予は永生を信せざるを得ないのである、然らば凡ての人が救はれて永遠の生命を完ふするかと云ふに予は否らずと答ふ、所謂招かるゝ者は多しと雖も選ばるゝ者は少ないのである、是自然界の通法にして特に靈界に於てのみ然るのでない、然らば其救はれざる者は如何と云ふに、予は之れを以て直に永遠の地獄に入るとは信じない、强て推斷を下せば、彼等は自然に消滅して自覺を失ふに至るのである、要するに靈魂の不朽は適種生存の理法に從ひ、神の生命に合する者は益々發達して永遠に至り、神の生命に背く者は終に枯衰して消滅に歸するのである、アミエル曰く世の多數者は An Appearance, a Vanity, a Nothingness. にして、選ばれたる少數の者は An Appearance, a Growth, an Eternity である、と、小數聖者の靈魂は進化して已まないのである。

予が現今の未來觀は茲に達して、始めて余が衷心に燦たる光明を放つて居るのである。

時代思想 終

瞑想錄

瞑想錄

Supreme moment

人其天職を自覺する瞬間は、「神」と「我」とが心約を結ぶ時にして、此時は實に人生の Supreme moment なり。此瞬間ほど神聖にして莊嚴なるはなし。我れ今日此時に逢ふ。

我れ獨り登るにあらず

今我が登らんと決心せし斯道は、我れ獨り行くにあらず、我始

めて登るにもあらず。基督は言ふも更なり、彼れの前にも彼れの後にも、義を慕ひ、眞を求め、神を見し聖人義人は、皆此途に登れり、彼等の殘せし足跡は、尙ほ温氣を止む。今も尙ほ我が知らざる聖士我と共に此途にあるや疑ふ可らす。嗚呼我れ彼等を思ふて心を强うすることを得たり。

至難の教化

教壇に立つて教を說くは易し。親屬家族に道を語るは難し。他人を救ふは易く、己に屬する者を感化するは至難の業なり。然れども我れ之を成し能はずんば、我信仰は虛にして實なきを表證するものと知れ、彼等を救はんには、口を以て教を說かず、身を以て「道」を示せ。汝の行は無言の說教なり、己れに近き者を救ふは此說教ある而已。

汝此處に居るは善し

基督新生涯に入らんとする劈頭に當り、聖靈に導かれて野に行き、四十日四十夜食ふことをせざりしといふ。我亦た導かれて此地(修善寺)に來る、大に意味あるを覺ふ。食すれども我其味を知らず、机に寄るも事手につかず、身は俗界にあれども心はこゝにあらず。我れ今何を爲しつゝある乎。何者か我を驅つて絕對無限の境に誘ふ。抑へんとして抑ふる能はず、止まらんとして止まる能はず。聲雲より出でゝ言ふ。「汝此處に居は善し」と。嗚呼我れ歸る

を忘る矣。

大悟徹底

回顧すれば我れ基督教を信じてより、約三十年を經過す。迷信の時代あり、懷疑の時代あり、僞善の時代あり、煩悶の時代あり、暗黑の時代あり、墮落の時代あり、信仰皆無宗教絶無の時代あり、而して今や。

死地に臨んで生を得たり矣。

大悟徹底とは其れ此れを謂ふ乎。我れ唯懼れて感謝あるのみ、讃美あるのみ。

死よ汝の蘇は何處にある

我が靈や既に神の懷にあり、我が心や常に靈界に居る。我れ確かに無究の生命を有するの自覺あり。身は尙ほ此世にありと雖も心は最早や此世にあらず、我れ今死の恐るべきを忘る。此世を去ツて彼世に移る、我れ古き靴を脫して新しき靴を穿つの感あるのみ。危き海上の旅路を終へて「テラフハマ」に上るの感あるのみ。而して我は萬世を貫通せる大命脈大生命と繫がる。肉體の死我に何かあらん。死よ汝の蘇は何處にある、陰府よ汝の針は夫れ那邊にあるや。

自愛の眞義

我れ今朝祈禱の中に「自愛」の意義を悟る。自愛の眞意義は其身を神に獻じたる人のみ之を知る。我は是れ神の屬なりと思へば之を愛し、之を重んじ、之を傷けず、之を損はず、以て神の業を爲さざる可からず。自愛と自利との別は自己を神の屬とすると否とに依つて定まると知るべし。神の爲に自己を愛するは是れ善、自己の爲に自己を愛するは是れ惡。

我に多くの友あり

我に多くの友あり、我を知らざる友あり、我を好まざる友あり、我を誤解する友あり、我を輕蔑する友あり、我を敵視する友あり、我を無視する友あり、又た我を利用せんとする友あり。神よ彼等の缺點を言はず、彼等の中にある善なるもの、美なるものを賞し、彼等を愛し且つ貴ぶことを敎へ賜へ。彼等の爲に祈ることを敎へ賜へ。

神靈の器

我が五體は神靈(Divine Essence)を容るゝ器なり。我は卽ち神の殿たり。我が口は神の口、汚れし言葉を吐く可らず。我が手は神の手、宜きに適はざることをなす可らず。我が足は神の足、危き所に運ぶ可らず。我が腦は神の腦、神の心に適はざる一切のことを思ふ可らず。我が心は神のハート、宜しく愛を以て滿すべし。此の修養成熟する時は「我を見し者は神を見しなり」と言ふことを得る

に至らん。

林檎と柿

予れ今日一青年の口より神の聲を聽けり。彼れ曰く僕一日一人の小兒が口に林檎を銜へるを見て甚た奇異の感をなせり。日本の小供が林檎を口にするは不似合なるを思へり。我れ若し彼が柿を喰ふを見ば決して斯る感事をなさゞりしならんと。予は此の所感を聞いて感嘆措く能はざりき。日本人が輸入的基督教を信じて得々たるは宛も小兒が林檎を口にして喜ぶに似たり。之を見る者不自然不似合の感なきを得ず。今や我が悟れる靈光は「所謂」基督教に非ず、又た佛教にもあらず。純日本人なる心魂の

根底より發し來れるものなり、柿の味を知る我が同胞は必らず能く我道の味を知ることを得ん。嗚呼是れ我が多年求め來りしもの、遂に今之を得たるを喜ぶ。

靈感と心動く

黑雲忽ち破れ、龍天より落ち來つて水中に入る、我れ龍の姿を見ざれども水の動搖を見てその龍なるを知る。聖靈降りて我心に入る。予れ聖「靈の形を見ざれども、我靈感じ、我心動くを以て其聖靈なるを信ず、夫れ「風は己がまゝに吹く、汝其聲を聞け共何處より來り、何處へ行くを知らず、靈によりて生るゝもの此の如し」と云ふ。是れ今我れの實驗する所なり。然れども我れ獨り此恩惠

を受くるの德ありと思はず。人若し其心を虛ふし、全く私情を拂ひ去りて神に己を獻ぜん乎、迅風忽ち響き渡り、靈火來りて其心を滿たすに至らむ、聖靈を受くるの祕訣、他に復た途あらんや。

思之思之思到於通

眞理は宇宙に滿てり、時に我心之に觸るゝと雖ども我之を逸すること多し。眞理の影目に映ずれば足を止めて之を求めよ、之を握るまでは動くこと勿れ。攻究穿鑿暫くにして眞理は漸く汝に其姿を現はし來らん。一問心に生せば考又考、其解決を果すまでは之を忘るゝ勿れ、眞理は遂に汝の心を照すに至らん。一喜一憂一成一敗、掘れよ掘れよ、必らず眞理の源泉は其底より湧き來らん。自ら考へて得たる眞理は限りなく汝の有たり、半分の眞理は未だ汝の有にあらず アミエル曰く

The unfinished is nothing 味ある哉此言。

是れ我筆我文にあらず

心に浮び來れる思想感情予れ之を筆にす。血肉之を我に示せるに非ず、予れ之を人に學びたるに非ず。神之を示し給へるなり。予れ之を反讀するに、是れ我筆我文にあらざるを知る。嗚呼妙と云はん乎、不思議と云はん乎、我れ心を虛ふして靜思默考、彼に對すれば、金思玉想滾々として湧き來り、我心熱するを覺ゆ。予れ始めて聖靈の神あるを知る。嗚呼予れ聖靈の神を見たり、聖靈を心

に宿す人は即ち大識見家、大思想家、大預言者なり。是れ信仰の奥義にして之を認識する人多からず。耳ある者は之を聽け、心あるものは之を玩味せよ。

變道か常道か

友と相會するや、先づ神の前に跪きて祈ることを爲し得るや。勉めて之を爲すに非ず、自づと祈るの心ありや。祈禱を不自然に感ずる心あるは、汝未だ靈界に親まざるの兆候なりと知れ。祈を以て友と交るは變道か、祈なくして人と交るが常道か、今日變道と思はるゝもの焉んぞ知らん人間の常道なるを。祈なくして人と交るは唯皮相の交りのみ。未だ心の交りと言ふ可からず。斯る友誼は境遇の移動によりて離散す、人汝を見て奇人と呼び變人と稱するも之を意とする勿れ。眞人は人間の常道を歩むと雖ども世の常人は之を變道と見ん、眞人は凡人にして凡人こそ非凡の人なりと知れ。

年を重ぬるにあらず

觀察せよ、世に年を重ぬる者と年と共に成長する者とあり。貨殖に汲々たる人、虚榮に戀々たる者。彼等は百年の歳を重ぬるも未だ人間として一歳の齡をも享けざるの徒、未だ生れて靈界の日を見ざるの輩なり。之に反し、精神の修養に努むるの士は、彼れ年を重ぬるに非ずして年と共に成長するものなり。彼が過ぎた

る歳月は今尚ほ彼の生命に存し、曾て去ることなく又更に消ゆることなし。徒らに年を重ぬるは益なし、宜しく年と偕に成長發達せよ。

危い哉靈的生命

人間の薄弱なる、一滴の水其胸を浸さん乎、五體の組織忽ちにして異動を始め、内外の機關遂に破裂し、思想は爲めに散亂し去り、世界も亦朝霧の如く消ゆ、人間の生命はそれ蛛網よりも危し、然れども更に危きものは靈的生命なる哉。一片の肉情心に動くや。道心俄かに消滅し、信念忽ち衰頽し、百日の修養も亦た徒勞に終る焉、豈に愼まざるべけんや。

悔いなき娯樂

起きては思ひ、寢ては夢み、予れ靈界に全心を傾注すること爰に數日、精神殆んど張り切つて破れんとするの感あり。今や暫く氣を轉じ心を放て娯樂を採るに若かじと思ひ、一盃の酒を飲み一片の俗謠を歌ふ、忽ちにして予れ大に誤りたるを悟る。肉に屬する娯樂は靈を傷け心を惑はすに至る。世俗の娯樂と信仰の修養とは永遠に矛盾して遂に兩立すること能はざるを悟る。嗚呼恐るべし。汝の求むべき樂は天然(ネーチュア)に在り、道友にあり、子供にあり、清き音樂にあり、罪なき遊戯にありと知れ。

我れ彼等に資を命じて可なり

我は「死」を以て起つ、赤誠天下を思ふて起つ、富者我を養ふの義務あり。我れ彼れのものを取つて食ふの權利あり。我れ富者の前に頭を垂るゝを欲せず、我れ彼等に資を命じて可なり。宗教を以て任ずるの士にして富者に媚び、金持に諂ふ者あり、實に是れ醜の醜なる者、何の面目あつて彼れ教壇に立つか、其說くところ言ふところに威信なきや當然なり、彼れ宜しく教界を辭して商界に下れ、是れ汝が教壇に忠なるを示す最後の方法なるぞ。

禍なる哉牧師傳道師

毎日曜日時を定めて僞言をつく者は牧師傳道師なり。聲をからして神の名を汚す者は牧師傳道師なり磨石を頸にかけて地獄の先頭をなす者は牧師傳道師なり。嗚呼禍なる哉僞善なる牧師傳道師よ、汝等は徧ねく水陸をへめぐり一人をも己が宗旨に引入れんとす。既に引入るれば之を汝等よりも倍したる地獄の子となすにあらずや、汝等は實に蛇蝎の奴輩なり我れ汝等を惡む。戒むべきは僞善なる哉、嗚呼僞善なる哉。

宣教師の金ほど恐ろしきはなし

宣教師の金ほど恐ろしい者はない、之を貰ふと良心を賣らねばならぬ、思想の獨立を抵當にせねばならぬ、こんな馬鹿げたこ

とが世にあらふか、然かも今日の「ミッション、スクール」に從事する人、外國の金を受けて傳道する者、皆此の慨然なる境涯に居るのである、斯る境涯にあつて苦しき日を送るよりは死んだ方がましだ。甘んじて斯る生活を營む輩は、心にもない愛嬌を振り蒔て蔭で舌出す藝娼妓に何の異る所がある、基督を心では人間と思ふても、宣教師の前では神樣だと云ふて居る、士氣もない腰拔男子？汝は我が唾棄にも價しない。

我れ唯天の命を待つ

基督は刄を以て世に出づ、是れ彼か荊棘の冕を戴き、十字架の死を招きし所以なり、彼の勇、彼の剛實に殷なりと謂ふべし。我亦靈光を懷て世に出で、教界の僞善を暴露し。政界の不義を叱咤し、滿天下を敵として其腐敗を衝かん乎。カリバリ山頭に我屍を曝らすや必然火を覩るより明なり、我れ切に之を欲す、然れども我れ未だ其人にあらず、我時未だ來らざるを知る。潔士は止むを得ずして起つ、奇功を求めて起つは非なり、予れ唯天の命を待つのみ。

靈界の寫生

昨夏予れ復堂氏と共に豆州伊東に遊ぶ。滯在僅かに數日。氏は一莖の筆と一册の畫帖とを友とし、朝に夕に其見る所を、悉く之を畫きて畫帖に藏む。予れ側にありて之を見、大に氏の技能を敬

ひ、又氏の快樂を羨む。今や予れ此修善寺に來り、一本のペンと一冊の日誌とを友とし、朝に夕に心に映ずる所一々之を描きて日誌に記す。是れ靈界の寫生なり。技術に於ては予れ復堂氏に及ばざる遠し。然れども寫生の快樂は復堂氏のそれに劣ることなしと信ず。復堂氏は自然界の寫生を樂み。予は心靈界の寫生を喜ぶ。予能く復堂氏の愉快を察す、今日の我歡樂は復堂氏の外誰か豈に之を知り得んや。

サタン我を攻めて麥の如く篩はんとす

嗚呼我時近づけり。將に此地を去るの時來らんとす。我れ此山を下りて歸らんとするに際し、彼の地に我を待つ者は我友にあらずして我敵なるを知る、彼等は我か此處に得たるものを奪はんとして我が歸るを待つ。我を賞むる者も敵、我を嘲ける者も敵、我を迎ふる者も敵、我を斥くる者も敵、我を戒めんとする者も敵、我を顧みざる者も敵、サタン我を攻めて麥の如く篩はんとす。然れども我が爲めに祈る者は我が神なるを信ず、我何を以て此生命にかへんや。我手我を礙かさば斬りて之を棄ん、我目我を礙かさば抉出して之を棄ん。我今神の武具を以て裝ふ。豈に誰をか恐れんや。

自動的信仰の復興

明治四十三年の劈頭に於て我れ確かに信仰復興なるものに

遭遇し、我信仰に一大發展を來たしたるを自覺す。昔時予れ此種の經驗を得たることありと雖ども、今回の信仰復興は前日のそれと大に其趣を異にするものあり、前日の信仰復興は他動的にして今日の信仰興復は自動的なり、曩きには神經的感情の勃興を見、今は宗教的思想の振興を來たす。昔は罪を悔ひ、過を悟り、且つ泣き且つ叫ぶ、其時の心や全然消極的なりしを記憶す。然れども今は絶對の悟覺を開き、無究の靈明に入る、我心の狀態確かに積極的なるを覺ゆ。前日の信仰復興は病的にして今回の信仰復興は實に健全なりとす。人猥りに我を笑ふ勿れ。

自由思想と宗教的熱心

人は言ふ「自由宗教を唱ふる者は遂に熱心なる信仰を失ふ、自由思想と宗教的熱心とは並行する能はず。狹き川は水其勢を減ず。我れ自由思想の爲めに宗教的熱心を犧牲にするに忍びんや」と。然らば請ふ我を見よ。我は三位一體を信ぜず、基督の神性を信ぜず、贖罪を信ぜず、地獄を信ぜず、又た聖書天啓說を信ぜず、殆んど歷史的宗教の必要だに疑ふ。宗教の自由思想は我れ之を尊崇するに於て何人にも讓らざるを信す、然れども我れ今信仰の復興に逢い、至玄至妙の大眞理に動かされ、猛火炎々我を蝕せんとするの熱心あり。自由思想と宗教的熱心の調和は今我心に成れり、川廣けれども水將に其堤を破らんとするの慨あり。

人を益するの言

苟も人に語らんとする時は、其一人なると多數なるとに係らず、又其座談なると演說なるとに論なく、まづ以て汝の心を靜かにし、其靈を虛ふせよ。敢て目を閉ぢ膝を折らずとも、心中密かに神の心何處にあるかを伺ふべし。默念默禱、暫くにして是れ理なり、道なり、眞理なりと覺るものあらば、始めて其口を開き、淳々乎として思ふ所を語るべし。決して己か辯に任かせ己か智を賴んで心になきことを云ふ勿れ、徒らに理窟を弄して時を塞ぐ勿れ、光明心を照らさゞる時は謹んで口を緘せよ。神の汝に示し賜ふものにあらずんば語つて益なし。神の汝に告げ給ふ言葉にあらずんば言ふて力なし。焉んぞ人を益し、亦人を動かすを得んや。

神智靈覺湧て泉の如し

我れ今日己の皆無なるを感ずると共に己の絕大なることを悟る。予れ元より無能にして何をも無し得るの力なし。人に比して勝れたるものなく、人に對して誇るべきものなし。我ほど卑怯なる者、小膽なる者、無氣力なる者、失望し易き者、恐くは世になかるべし。然れども己を棄てゝ「彼」を信じ、己を賴まずして「彼」に依り、己を虛にして「彼」を容るゝ時は神智靈覺湧て泉の如く、我智我力は實に無限無量なるを覺ゆ。無より有を生じ、死より生を產す。靈界の一奇蹟と謂ふべし。「信ずる爾等に對して行ひ給ふ神の力の極めて大なることを知らしめ給はんことを願ふ」

制し難きは我心なる哉

我を欺く者は我心なり。我を擄にする者も我心なり。我れ虚なりと思ふ時は却つて虚ならず、我れ神の心を得たりと思ふ時、已に私心我慾の伏在するを覺ゆ。我れ善を行はんと思ふ時に惡の我に居る此一つの法は我れ保羅と共に自覺せざるを得ず。忽ちにして顯はれ忽ちにして隱くれ、神出鬼沒究りなきはそれ自我なる哉。此死の體より我を救はん者は誰ぞや。

是れ我が目下の心狀

眞理又眞理、源泉滾々として盡くることなし、是れ我が目下の心狀なり。目を閉づれば眞理胸に浮び、目を開けば眞理瞳に映ず。胸次潑々呼ばざるに出て、招かざるに來るの慨あり。靈界を望めば其光明無涯遍照なり。彼の、連々として顯はれ來る新思想、續々として發し來る新自覺、我れ實に靈界のパノラマを見るの感あり。我れ之を作るにあらず、神之を示し賜ふなり。精神爲めに恍惚として我殆んど自失せんとす。想ひ起す基督の言

「我が與ふる水は泉となり湧き出でゝ永生に至るべし」

是れ我が意識なり

「汝等恒に祈るべし」とは保羅の曾て語りし所、我れ今漸く其意義を實にするを得たり。是れ人の呼吸する限り、恒に心に有すべき意識なるを信ず。我れ獨りある時は我がうちなる神と交り、彼と語るの感あり。我れ人に接する時は人のうちなる神に通じ彼

と交るの想あり。保羅が恒に祈れとは蓋し此意識に外ならざるを知る。我れ何處に行くも何者か我と共にあるの自覺あり。我れ何事をなすも何者か我をして之をなさしむるの自覺あり。我れ口を開くや何者か我をして言はしむるの自覺あり、神恒に我を離れず、我亦彼を離るゝ能はざるの自覺あり。是れ最早や信仰にあらずして我意識なり。此意識や我生命なり。我れ若し之を失はば我は平々凡々何の取るべきものなし。我に自尊自重の念ありとせば唯此意識あるが故のみ。

Humility which kneels

口に慈善を說いて金を出さぬ慈善家あり。口に信仰を說いて祈禱をなさぬ宗教家あり。金を出さぬ慈善家と祈禱せぬ宗教家とは共に僞善者なりと知るべし。未だ祈禱をなし得ざる信者は信仰の門に入らざるの徒、祈禱を廢せしクリスチヤンは墮落の徒なり。神の前に膝を折り、頭を垂るゝ者は眞に謙遜の人にして其人や敬ふ可し。

Humility which kneels

嗚呼予れ此心を貴ぶ、嗚呼予れ此人を需む矣。

我亦彼等を忍ばざる可からず

人格なき者猥りに人格の修養を叫び、私心滿々たる人立て愛の道を說く。我れ彼等を思ふ時は寧ろ口を緘し、不言以て餘生を

送らんことを希ふ。然れども仰て神靈に接し、俯して衆生を思へば亦言はずして止む能はず。人誰か此苦痛を知る。父の外に子を知る者なし」と祈りし基督、「我を知る者はそれ天乎」と嘆ぜし孔子の如きは共に此苦痛を實驗せしならん。人其人にあらずして道を說く者、我れ眞に之を惡む。然れども神は尙ほ彼等を忍び賜ふ。我亦神の大量を以て彼等を忍ばざる可からざる乎。噫。

何をか對話といふ

我れ己より低き者を見て之を賤めず、又た己より高き人に接して之を畏れざるの心を得たり。位置我れに下る者來つて我に語る時、我は謹んで彼に聽く。蓋し神彼を通じて我に語り賜ふ聲あるべきを思へばなり。位置我に優る人に行いて語らんとする時我れ彼を恐るゝの心なし。蓋し我が言はんとする所は神の聲なりと知ればなり。我れ人と語る。實は神と語るなり。何をか對話と云ふ。我衷にある神の靈と人の衷に在ます神の靈との交通に外ならず。人若し之を思はゞ、人によりて尊卑することなからむ。猥りに人を賤むは非。徒に人を懼るゝは愚。眞に畏るべきは唯神ある而已。

我は聽く無絃琴

我今日一大事業を成し得たるを自覺す。朝起きて食事を終へ吾が書齋に入るや、愛兒勇吾(七歳)及び東吾(五歳)の二人來ツて吾

が前に遊ぶ。彼等を見て思へらく、我れ今死せんと假定せば、我れ彼等に何をか敎へ、何の言葉をか遺さんと。彼等元より頑是なき者、我靈想を解する能はず。之を思ひ彼を想ふて小時を過ぐ。忽にして我は聞く無絃琴。—遂に致ゆるに此祈禱を以てす。「神樣よこの身體をあなたにあげます、アーメン」、彼等之を繰り返へすこと數回にして遂に之を學び得たり。彼等成長するに從ツて此意味を解するを得ん。彼等若し之を自覺せば千萬金の遺産よりも尙ほ其貴きを知るに到るべし。嗚呼神は今日我れに此一大事業をなさせ玉へり。

彼等我に何かあらむ

我れ今靈光を得て新生命に入る。則ち起ツて吾が天職を果さんとす。之を見て眞に我と共に喜び、我と共に感謝する者あり。我れ彼等によツて更に勇氣を得たり。然れども我れをして起たしむる者は彼等にあらずして吾神なるを忘る可からず。我れ彼等を愛すること血肉の兄弟を愛するよりも尙ほ深し。我れ彼等を信ずること殆んど自己を信ずるに均し。然れども彼等我を疑い、我を顧みざるの日來ることなきを保す可からず。我れ今心に誓つて曰ふ。彼等我に何かあらむ。我は神と共に起ち神と偕に往く。天下皆我敵となるも我れ豈に動かんや。孟子の所謂自ら省みて疚しからずば千萬人と雖も吾往かんとは是れ我が心事なり。

與へて減ぜざるものは眞理也

我れ今日二人の青年を招き、我が得たる靈的經驗を語る、我れ彼等に今我が心に有する最大最上のものを頒ち與へたるを自覺す。苟も人に向つて我が口を開く時は其時我がうちにある凡ての善きものを惜みなく與へざるべからず。與へて減ぜざるものは眞理なり。語り盡くして益々輝き出づるものは靈的光明なり。「爾の食いものを水の上に投げよ、多くの日の後爾再び之を得ん」とは、それ此事を意味する乎。妙なる哉聖靈の動作。不思議なる哉靈界の法則。

人の心は千差萬別

我れ往いて我が得たる靈的實驗を人々に告ぐ。之を聞きし人其數少なからず。我が語る所一なれども之を受くる人の心は千差萬別。或人は之に贊成を表するのみにして自ら之を得んと欲するの願なし。或人は未だ自ら之に達せずと雖も欽慕措く能はざるの情を表せり。或人は自ら欺きて既に之を得たる者の如く超然たり。或人は更に我言ふ所を解せず、唐人の寢言の如く聞けり。而て僅かに二三の友は且つ喜ひ且つ祝し、宛も死せし者の再び甦りしが如く、失はれし者が復た歸へり來りしが如く、己を忘れて我と共に歡べり。想い起す基督の種蒔の譬を。道の種は一なれども土地に因りて其成長を異にするの狀、寫し得て實に妙なりと謂ふべし。

此處に我が永遠の事業あり

人若し何處にあるも我は永遠の事業をなしつゝありとの自覺あらば、彼は實に至幸至福の人なり。我れ今此幸福の何たるを知り得たるの感あり。我れ家にありて家族と交る、卽ち此處に我が永遠の事業あり。我れ學校に行つて學生を敎ゆ、卽ち此處に我が永遠の事業あり。我れ敎壇に立つて道を說く、卽ち此處に我が永遠の事業あり。我又書齋に退いて書を繙く、卽ち此處に永遠の事業あり。愚かなる哉我れ曾て此事業の那邊にあるやを疑ひ、或は之を此處に求め、或は之を彼處に探りたり。焉んぞ知らむ、我がなすべき永遠の事業は總ての所にあり。總ての時にあり、而して總ての業の中に存せるを。我れ今や此身を神に獻じ、專心一意宗敎的事業をなすを以て是れ天職なりと自覺せり。其心や善し。然れども其の宗敎的事業なるものは、啻に敎壇の上にのみ之をなすべきにあらず。家にありて我れ之をなさゞる可からず。學校に行きて我れ之をなし得るなり。何れの時、何れの處にも我れ此事業をなすべきなり。我れ之が爲めに天の召を蒙りたり。是れ我が多年求め來りし我がライフワークなり、是れ實に我が永遠の事業なり、我れ今日始めて之を悟る。更に安心立命を得たるの感あり。我れ之を人より學びたるに非ず、神今朝祈禱の中に之を示し賜ひしを感謝す。

盲者の手引

我れ今日或る牧師の祈禱を聞く。或は「天にまします我等の父よ」と呼び、或は「神よ汝の榮を顯はし賜へ」と祈り、又或は「御國を來

らせ賜へ」と唱ふ。唯慣習的に之を口にするのみ、其の眞意義を解して言ふに非ず。此の種の宗敎家世に其數鮮しとせず。彼等が宗敎を喋々するは猶ほ鸚鵡が人間の言葉を眞似するに似たり。其辯舌は巧みなりと雖も、其言葉には能力なく、又更に權威なし。彼等は僞善者にあらざるべし。然れども唯徒らに聖書の文字を知るのみにして、未だ其聖旨に達せざるの徒なり。嗚呼憐むべきは盲目の宗敎家なり。而して更に憐むべきは彼等に敎へらるゝ盲目信者なり「盲者の手引する盲者」とは夫れ彼等を謂ふ乎。

進歩ありて退歩なき生涯

我れ新に生れたる其日より靈的生命には進歩ありて退歩あるを見ず。生あつて死あるを知らざるなり。我れ何處にあるも我心は恒に靈的思想に滿ちて向上狀態にあるを自覺す。是れ卽ち進歩なり、發達なり、成長なり。然れども形而下界に居る者を見よ。彼等は其の思ふ所により或は墮落し、或は退歩す、然らずんば同位置に停滯して、進歩もなく、發達もなきの時を過す。彼等の精神的狀態は之を言語に寫せば「死」なる文字を藉りて之を表せざるを得ず。我は夫れ何の幸か、甦りて形而上界の人なるを得、心は恒に靈界に住むの自覺あり。時に或は汽車に乘り、或は電車にありて空しく時を費すに似たりと雖も、我心は淸き神殿に座して至大至高の眞理を學びつゝあるの感あり。靈的進歩は此中にあり。靈的成長は此間に得らる。嗚呼進歩ありて退歩なきの日を享け、生ありて死なきの生涯を送る、我れ之を以て最大幸福となす。我

れ之を稱して無究の生命といふ。

我は王なり又僕なり

我は王にして且つ僕たり。我れ神の愛に滿ちて世に對する時は、我は卽ち人類の下男なり。我れ神の義を體して世に向ふ時は、我は卽ち人類の帝王なり。眞人は恒に此自覺を有す。弟子を集めて其足を洗ひし基督は、ヘロデの前に立つて「我は王なり」と宣言せしに非ずや。

道を語る者なし

道友曾て曰く天下の智は腦の智と。我れ實に同感に堪へず。友相會すれば各々其知を誇り又其才を賴んで意氣楊々たり。而して其語る所は皆腦より出でゝ腹より出でず。道を語る者絕へてなし。彼等の言論を聽く時我れ唯其喧擾に堪へざるのみ。實に何の趣味だに感ずることなし。孔子の謂ゆる「群居終日言不及義」とは蓋し此輩のことを言ふ乎。

人間の光榮之に過ぐるはなし

處として神に交る能はざる所なく、時として神に交る能はざる時なし。我れ一度び瞑目すれば聖境自ら臻る。我靈は則ち神の靈と一、人間の光榮之に過ぐるはなし。心こゝにあらん乎、我れ更

に世に求むる所なし、富貴も我を淫する能はず。威武も我を屈する能はず。古人の謂ゆる水に入るも濡はず、火に入るも燒けずとは蓋し此心事なる哉。

前日の苦今日の快

我れ人の前に立つ時、彼等に與ふべき何ものかを有するの自覺あり。此自覺を以て敎壇に立つや、靈想靈感自ら胸中に湧き來り、言從つて出づ。我れ曾て此自覺なく、徒に思想を錬り、言字を工夫して說敎を試んとしたる時代ありき。卽ち心に無くして敢て口に何ものかを言はんと努めたり。今は卽ち然らず。心に滿つるより之を口に述ぶるのみ。前日の苦と今日の快蓋し同日の論にあらざるなり。今や我れ敎壇に登つて口を開くや源泉滾々盡くる所を知らざるの感あり。基督曰く我は道なり眞理なり生命なりと。苟も人に敎を說く者は常に此自覺なかる可らず。

無我の大我

無我とは何ぞ、空にあらず、虛にあらず、神思に滿つるをいふ。人無我の境に達すれば聖靈來つて其心に宿る。是れ卽ち無我の大我なり。我は永遠に虛ならんを希ふ。是れ神に滿ちんが爲めにして我れ虛ならざれば、神我に滿つる能はざればなり。嗚呼觀し來れば我は唯我ならざる者を容るゝの器たるのみ。此の信感之を宗敎といふ。

我に永遠の所有なきか

人自ら稱して是れ我が所有なりとするもの一として其所有なるものなし。世の所謂る私有財産なるものは一種の迷信に過ぎず。夫れ天下に何物か之を永遠に所有し得るものある。大厦高樓を築きて是れ吾家なりと誇るものありと雖ども、火はよく之を燒き盡くして烏有に歸するなきを保せんや。數十百町の土地を圍みて是れ我が宅地なりと傲る者ありと雖も桑圃化して蒼海となるにあらずや。此手此足此身體は我有なりと雖ども、死來りて之れを我より奪ふにあらずや。凡そ物を指して是れ我有なりとするは唯法律なるもの之を認定するのみ。法律之を認定す

るも天は決して之を許さず。觀じ來れば天地萬物皆是れ我有にあらず。秋毫の末も我れ之を所有するの權なし。然らば我に永遠の所有なき乎、曰く之れ有り、神は則ち我が永遠の所有なり人一度び之を得れば何人も之を奪ふ能はず、何者も之を動かし能はざるなり。天下の凡俗は其所有ならざるものを所有すと思ふて得々然たり。實に憐むに堪へたり。今や我れカイザルの物はカイザルに歸へし、神の物は神に歸へし得たるを自覺す。人若し我を訟へて裏衣を取らんとせば、我れ能く彼に外服をも取らせ得るの心を得たり。トルストイは門戸を開放して寢に就き、更に盜人の侵入を防がずと云ふ。我れ敢てトルストイに倣ふて此奇行を爲すを欲せずと雖ども、我が心狀は卽ち彼の心情と一つなるを覺ゆ。然れどもトルストイは基督の敎訓を文字的に遵守せんと

して此心を得、我は宇宙を達觀して此心を得たり。トルストイの如きは尙ほ孔子の所謂「硜々然として小人なる哉」的の人、而かも彼れ俗物にあらず、以て士と爲すべき人也。

Death to Self

嗚呼自殺なる哉、自殺なる哉!!

抑も自殺は人の忌む所にして又た法の許さゞる所なり、然れども爰に一種の自殺あり。法律も之を咎めず、神も之を嘉みし賜ふ。卽ち私心我慾の自殺これなり。人若し此自殺を遂げざれば、神靈は永遠に其心に宿る能はざるなり。

小我を殺して我れ大我を得たり。

人慾を討して我れ靈光を得たり。

是れ古往今來先覺者の均しく實驗する所にして豈に疑を容るゝの餘地あらんや、天下の商人自殺せよ、天下の政治家も自殺せよ、敎育家も宗敎家も皆悉く自殺せよ。汝若し自殺するを得ざれば汝は終生一種の器物として果つべきのみ。人間たるの自覺は汝遂に之を得る能はず。人生の意義は汝遂に之を悟る能はず、安心立命は汝遂に之を知る能はざるなり。

アミエル曰く。

"Death to self — this is the only suicide which is both useful and permitted."

我れ彼に對して欠伸す

我れ今漸く肉情の束縛より脱したるを覺ゆ。美人我目に映ずるも我心に觸れざるの境涯に達せり。絶世の美人我が前に顯はるゝも我能く彼を眺めて欠呻するを得べしと信ず。靈に屬する者は靈の情を思ふて肉の情を忘るゝに至る。前日の我は則ち然らず、婦人を見るや何ものか肉に屬する思想の心胸に浮び來るを以て常とせり。我れ密かに我が心の劣等なるを耻づること久し。然るに今や神我れと共にあるの自覺を得、靈感常に心に往來して止む時なく、遂に肉慾肉情を思ふの暇なきを覺ゆ。我れ最早や善衣美食を欲するの心なく、婦女に戯はむるの願なし。我れ唯諸人の靈界を悟らざるを憐むの情あるのみ

神は此人の中にあらず

我れ神に在りて活き働き且つ在ることを信ず。然れども事に從ふの時、我れ神を自覺し居らざることあり。我れ空氣を呼吸して存在するを知ると雖ども、常に之れを自覺し居らざると一つなり。靈的生涯に入るの初めに於て、人大に此自覺なきを憂へ、此自覺なきを以て信仰足らざるが如く思ふと雖ども、是れ決して信仰足らざるにあらず、又た信仰の熟せざるにもあらざるなり、專心事に從ふ間は同時に神を思ふ能はず。神を思はずと雖ども神と離るゝにあらず。一度事を止めて自反する時、心に一の疚しきものなく、神直に其心に來り我靈直に神に通ずるの自覺あらば、是れ靈的生涯にあるを證するなり。然れども其爲す所の事宜しきに適はざるか、或は其事善なるも之を爲す心正しからざれば、神は其人の中にあらず、一朝心を轉じて神を思ふも、其心は直

に神に通ずる能はざるの感あるべし。此人宜しく憂へざる可からず、蓋し彼れは靈的生涯に居らざる事明らかなればなり。嗚呼何れの處何れの時にも神直に其心に來り、其心直に神に通ずるを得る人は福なりと謂ふ可し矣。

悟境の人

人豁然として道を悟れば俗界を賤み、俗事に鞅掌するの愚なるを覺ゆ。然れども更に悟道に熟達すれば却て俗界に居るを喜び、俗事を靈化するを樂しむ、道を悟りて俗界を棄つる者、未だ眞に悟達の人と謂ふ可からず、道を悟つて再び俗界に墮落する者の如きは、抑も初より道を悟りたるにあらざるなり。

〇とは何ぞや

一日予が最も敬愛する無名氏來りて予に左の一文を示さる。予之を一讀するに予が〇の所感と符節を合するが如きものあり。極めて味ある文字なれば、無名氏の同意を得て此處に之を掲ぐることゝした。

〇トハ何ゾヤ、曰ク〇ナリ。何ハ卽チ何タルガ如ク、繪ニアラズ、字ニアラズ、事ニアラズ、物ニアラズ、聲アルガ如クニシテ聲ナク、臭アルガ如クニシテ臭ナシ。混沌未分ナルガ如クニシテ然モ透明無色ナリ。余之ヲ名狀スル能ハズト雖モ、又常ニ其德ヲ尊重敬信ス、而シテ自ラ其所以ヲ知ラザルナリ。蓋シ畫家之ヲ點ト云ヒ、

算ニ於テ之ヲ零ト云ヒ、數ニ於テ之ヲ幾何ト云ヒ、學者或ハ之ヲ空間又ハ時間ト云ヒ、易ニ之ヲ太極ト云フ。太極ハ卽チ無極ヲ意味ス。或ハ宇宙ノ象ト云フモノアリ。宗教家之ヲ靈ト云ヒ、世間往往之ヲ不可思議ト云フ。而メ未ダ其不可思議ノ定義ヲ聞カズ。釋迦ハ之ヲ釋テ佛ト云ヒ。耶蘇ハ之ヲ尊デ父ナル神ト云ヒ、國學者ハ之ヲ崇テ天御中主尊ト云ヒ、孔丘ハ之ヲ敬テ天ト云フ。或ハ皇天上帝若クハ造化主宰ト云ヒ、又ハ天父ト云ヒ又ハ天尊神明ト云ヒ、又ハ宇宙ノ象トナシ、圓滿自在ノ府トナスモノアリ。各々觀ズル處ノ人格及ビ地位目的又其方面ニ依テ心頭ノ映象ヲ異ニシ、又其關スル處ニ依テ名稱ヲ異ニスルガ如シト雖モ、蓋シ人間以上ノ權能ヲ有セル衆理ノ大原、萬有ノ基タリ。ノ德タル又浩大無邊ナル哉。

我れ唯一人

予去夏旅行中各地出水のため瀧車不通となりて歸るを得ず、空しく旅館に籠城すること十數日、此間頗る寂寞を感ず。東京に家族あれども數千里の外にあるが如く思はれ、周圍に多くの人あれども一人の語るべき者なく、I am alone——我唯一人なる感に滿たされた。嗚呼「我唯一人」！是れ實に貴き自覺なるよ。凡て何れの時何れの處にあるも——人生の深き所に至れは——我は唯一人あるのである。目を拭い心を醒まして神の御前に自省せよ。我は夫れ唯一人てふ感に打たれざる者誰かある。悲嘆に沈む時、死に瀕する時、事を決せんとする時、責任を感ずる時、我は唯一人にして、何人も其瞬間に我に參與することは出來ない。此寂寞

を破つて我に能力を貸す者は唯神のみである。アミエルも亦之を經驗したと見ゆ。彼曰く

"In all the chief matters of life we are alone. — We dream alone, we suffer alone, we die alone, we inhabit the last resting-place alone. But there is nothing to prevent us from opening our solitude to God."

と。神と偕に唯一人なる自覺を常住不變の意識とせんこと、是れ予が今日の修養である。我に爾等の知らざる糧あり」の語は今日の我に無量の興味を與ふ。

責むべきは我

我に一人の友あり。我れ其才幹を敬ふ。又其學識を敬ふ、然れども彼は敬虔の心に乏しく、屢々談笑の中に神を愚弄するの語を發す。我れ彼の爲め之を悲しむこと久し。然れども責むべきは彼にあらずして我にあり。彼が神を愚弄するは我を愚弄するにあらざるなきを得んや。我に若し靈德具はり、我が人格よく神を現はすことを得ば、彼は畏れて我が面前に苟も不敬瀆神の言を口にするを憚るに至らむ。

年頭の決心

幾度か新年を迎へ、幾度か一年の決心をなす。然れども其年の終に到つて回顧すれば、年頭の決心と希望と計畫とは、何時の間にか消滅して、更に痕を止めず。我は感ず、我が生涯は我の作るも

のならで我ならざる大能力が、其意のまゝに作り給ふことを。故に今年の我は一切の作意を廢し、謙虚以て身を彼れに任かし、我が生涯に開展し來る彼れの深き意志に遵ひ奉らんと欲す。我は唯我か求むる所、思ふ所よりも、大に勝れることをなし得る者に限りなく榮を歸せんのみ。

無言の祈禱

我が靈はそれ言語よりも大なり。言語は僅かに我心の半分を表はし得るのみ。宜べなる哉、詩人テニソンの言や、

"For words, like nature, half reveal and half conceal the Soul within."

我は我ならざる大靈に向つて、我が心を語らんとする時、言語は却つて彼我交通の障碍たるを覺ゆ。爰に於て我は寧ろ無言の祈禱を以て有言の祈禱に優れりと思ふ。

是れ我か影

我が生涯を一貫して爲し來れる事業は、是れ我が影なり。我れ曾て實業に志したるとあり、而して我れ今教育に從事す。然れども是れ皆我が accident にして我れの本領にあらず。要するに我は宗教を以て一生を送り來り、我が最高の趣味は宗教にあり、我が最大の努力も亦宗教にありき。明治十年代は我が迷信の時代、明治二十年代は我が懷疑の時代、明治三十年代は我が異端の時代、而して明治四十年代は是れ我が大悟徹底の時代なり。嗚呼我は、

宗教の人として生れ宗教の人として終るべき運命を有す。我れ過去の生涯を顧みて更に遺憾なし。感謝あるのみ、讃美あるのみ。

生きよ生きよ

病人は一種の品物にして、最早や人間にあらずとの說をなす者あり。又た病中の歲月は生命に數ふべからずとの說をなす者あり。兩つながら一理あるの說なり。然れども之を精神的に解釋すれば、尙ほ一層の眞理あるを覺ゆ。それ病的靈魂を有する者は人にして人にあらず、醉生夢死の中に世を渡る人は、百年の齡を重ぬと雖も、是れ病床に百年を過すと均しく、未だ一日の生命をだに完ふせざるの人なり。生きよ生きよ、生きて一年の月日を送るは、死して百年の齡を重ぬるに優る。

神は我が戀なり

神よ爾は我が戀なるよ。戀なる文字はいまわしけれど、我が心を識り給ふ爾は、我が斯くいふを許し給ふを信ず。神よ我れ爾の姿を見れば、心跳りて狂せんばかりなり。我れ其の何故なるをいふ能はず。斯くばかり我は爾を愛す。世界は總て無となるとも、爾我と偕に居まさば、我に於て何かあらむ。友は我を嘲けるも、我は尙ほ爾に向つて涙を灑がん。神よ我れ爾の御手を握る時、爾と我との間に一種云ふ可らざる溫情の絕へず通ふことを自覺す。神よ我れ爾と相抱く時、歡極つて其儘死を願ふの感をなす。神よ何

故に我は斯く爾を慕ひ、こがれ、愛するに至りしか。西行法師の「かたじけなさに涙こぼるゝ」とは蓋し此種の心情なる哉。嗚呼神よ我は爾と離れて一日も生くるに堪へざるを爾能く知り給ふ。此の深大なる、此の痛切なる、此の拔く可らざる渴仰思慕の情を與へし者は神よ爾なり。此の熱情を我に與へ乍ら、爾は我を棄てゝ永劫に我を苦め給ふごとき殘酷無慈悲なる事を爲し給はざるべし。神よ今も後もいつまでも、我は我が心の宮に爾を宿し護らん。

醜の醜なるもの

慈善で飯を喰はふとする慈善家あり、修養論をかいて金を儲けようとする著述家あり、說敎で衣食の料を得んとする宗敎家あり。是れ皆パリザイの徒なり、僞善者なり。若し醜の醜なる者ありとせば蓋し此輩をいふならむ。惡むべき哉僞善者、禍なる哉僞善者！

印度に聲あり

印度に聲あり「將來の宗敎は佛乎、曰く否。基乎、曰く否。儒乎、曰く否。然らば將來の宗敎は何宗なる乎、曰く將來の宗敎は總ての宗敎の精を拔き、凡ての宗敎の粹を聚めたる人間共通の宗敎なり」と。印度に此聲あり、日本にも亦此聲あり、世界到る所に此聲あり、是れ果して何者の聲ぞ。嗚呼心ある者宜しく此聲を聽け。

人類進歩の敵

將來の宗教を宣言する我黨は將來の經典(The Bible of the Future)を希望せざるを得ない。歴史的宗教のどれにも滿足しない我黨は今日までの經典に滿足の出來ないのは當然である。嗚呼孔孟釋基の經典に優れる經典を我に與へよ。宗教は永遠に進歩開展す、經典も亦絶へず改造せらるべきである。神の默示が或る一時代にのみ限られ、此默示を包藏する或る書物が無誤謬だとの信仰は人類進歩の大敵である。我黨は極力斯る迷信を打破せんとするのである。

宗教の本領

宗教はつまる所個人的のものである。社會的宗教など呼ぶ人は未だ宗教を味はない人である。宗教の本領は極端に個人的である。信仰の目には天地もなく、人類もなく、國家もなく、社會もなく、家族もなく、「我」てふ自覺あるのみである。此自覺あつて始めて神を渴仰するの心生ず。是れ宗教である。宗教の感化は社會的ならんも宗教夫れ自身は極端なる個人性のものである。

物來鬼入

人間の心の底には一つの深甚なる要求がある。富も力も學問

も名譽も將又た全世界を得るとも尙ほ滿すことの出來ない要求がある。此要求に思ひあたり、之を自覺した人は福である。然し世の多くの人は遂に此要求を悟らずして終るのである。獨り偉大なる靈魂を有する人のみ痛切に此要求を感ずるのである。此要求を自覺して煩悶又煩悶の結果覺へず嘆聲を發する時、其聲に應じて忽然として其前に現れ立ち賜ふ方がある、莊子は之を物來鬼入といふ。此の貴き經驗卽ち宗敎である。然るに世の識者は此の心靈の大事實を認識せず、宗敎を以て一種の方便視して得々たり。世には悧口な馬鹿が多いのである。目ありて視、耳ありて聽く者は福なる哉！

實行は信仰の試金石

爾誠に信仰ある乎

若し之あらば之を爾の行爲に實現せよ。實現なき信仰は空想のみ、更に益なし。爾徒に信仰を談ずるを止めよ。寧ろ沈默を守りつゝ信仰を爾の行爲に實證するを努むべし。先づ試に信仰を一日の生涯にだに實現せよ。去らば爾の信仰が唯一片の空想なるか、將又た爾の內的眞生命なるかを知るを得ん。實行は信仰の試金石なり。

無言の敎化

世に無言劇なるものあり。更に言語を用ゐず、動作を以て情を表はすの藝術なり。我れ無言傳道の貴きを感ず。心誠に神に居り、

道洵に「我有」となれば、言語なくして聖感能く人を動かすを得ん。我れ若し病を得て啞者となるも、能く道を人に傳へ得るの用意なかるべからず。嗚呼難い哉無言の敎化、沈默の傳道！

友を友とせよ

我に一友あり。彼れ果して友情の何たるを解し居るや我れ大に之を疑ふ。彼は己が事業を崇拜す。其事業に益ある者は友として之に親み、其事業に益なき者は棄てゝ之を顧みざるの傾向あり。事業に熱心なるは敬服に堪へたりと雖も、事業を外にして友を友とする無我の愛てふもの彼が心に絶へて之なし。我れ密かに彼の爲に之を惜む。噫！

神の求め給ふ所我が求むる所

神よ爾の我に需め給ふものは、唯我が爾を愛する此の心ならむ。我爾に我が富を獻ぐとも爾に於て何の用をかなさむ。我の智、我の力、我が有てる凡ての物を爾に供すとも爾に於て何の益かあらむ。爾若し此等のものを受け給はゞ我が爾を愛する「シンボル」としてのみ受けさせ給ふ。然り然り、神よ我が爾に需むるものも亦爾の我を愛し給ふ其の御心のみ。我れ他に何の望む所又た願ふ所なし。爾若し萬物を我に與へ給ふとも、爾の心を我に與へ給はずば我は氣餡へて死なんのみ。我れ如何に豐かならむも神我心に宿り給はざれば我は無限の寂莫を感ずべし。鹿の溪水を

慕ふ如く我は永遠に爾を渴仰す。

父上の一言にて足れり

祈禱は多辯を要せず、眞に祈禱の心生じ來れば「父よ」の一言にて足れり。嗚呼祈禱の言葉をいふは易く祈禱の心を得るは難い哉。

儀文は精神を殺す

祈禱が儀式となれば最早や祈禱にあらず、傳道が職業となれば最早や傳道にあらず、儀文は精神を殺す。自ら戒めざる可らず。

此人敬ふべし

宇宙の草を拔くと思ふて働く園丁は道を樂しむ人なり、神と偕に働くの士なり。此種の人は敬ふべく賤む可らず、

自我の捕虜

自己の信仰を誇り我れ獨り醒むと思ふ者は自我の捕虜なるを知らず、此種の人は憐むべく惡むべからず。

道は自ら傳はる

言說を以て道を傳ふは効極めて少なし、自ら道を體して之を實行に示すに若かず、道は自ら傳はる。

宗教の獨立

合理的宗教……其名や一寸美しく學問を以て無上のものとする青年學生輩を瞞着するには足らん、然れども我は斯る宗教を以て一笑に附ずるのみ。倫理的宗教……是れ亦盲人が手さぐりで物を判ずるに均しく宗教の極意に達すること難し。哲學者や倫理學者は僭越にも宗教を己れの領分に引き入れんとす而かも斯る不謙遜な態度で宗教が解るものではない。宗教は哲學や倫理を超越した別世界卽ち神祕の境に其存生を有するのである。要するに宗教は直覺である、發見である、靈覺である。感得である。此の種の經驗と意識を有せずして宗教を喋々するのは、たわいもない愚人の寢言である。

奮鬪せよ猛進せよ

病魔と奮鬪して健全の途に猛進せよ。
情慾と奮鬪して克己の途に猛進せよ。
放心と奮鬪して信仰の途に猛進せよ。

不思議なる哉性情

人のために盡くす所多ければ、其人を愛するの情切なるを加ふ。愛すること切なれば更に又た其人のために盡くすの心を生ず。不思議なる哉人間心理の作用。血を分つと雖ども愛なくば他人に均しく血を分たずとも愛生じ來れば骨肉の情を發す。我れ頃日之を經驗するの機會を得て大に悅ぶ。

止み難き靈性の要求

我は祈禱の必要を認めずと言ふ者がある。心だに眞の道にかないなば祈らずとても神や護らん」を口にして己れの無信仰を掩はんとする人がある。焉んぞ知らん、祈禱は神を自覺したる者の最も深甚なる、最も痛切なる、止むに止まれぬ要求である。祈禱の必要を認めないと公言するのは未だ見神の實驗なきを自白するのである、寧ろ謙遜に正直に知らざるを知らずとして己が無信仰を告白せよ。

只神の聲に從ふ

人は我を見て我儘氣儘なりと言はん。世は我を評して無主義無定見なりと評せん。我れ人には斯く見らるゝとも神には最も從順にして且つ忠實なりと思はるゝを信ず。我れ動く時は神の命を聽て動き、我れ止まる時も亦神の命を待つて止まる。我は終始人間を相手にせず、去就進退只神の聲に從ふ。世人の評や友人の誹は、更に意とする所にあらず、敢て之を辯解せんとするは偶

偶以て信なきを表證するに止まる。神と共に活き神と共に動く者は世評の爲めに其心を動かすことなく、白隱と共に「そうかそうか」で過ごし、基督と共に「智慧は智慧の子に義とせらる」と信じて世を渡るべきである。

主觀的信仰と客觀的實在

時に我れ明らかに神を見て光明の中に立つの感あり、又た時に我れ神を失いて暗黑の裡に迷ふの感あり。昨日の有神は今日の無神、嗚呼我れほど變り易いものはない、我ほど賴りないものはない。然れども變るものは我が觀念にして神は昨日も今日も變り給ふことなし月光時に雲霧に蔽はると雖も月光其光を失ふのでない。雲霧散ずれば月光はもとの如くにして更に變ることはないのである。今より後我れは我が主觀的信仰を賴みとせじ。神に關する人間の思想は常に動搖して止む時なし。動かず變らざる神こそ我能力なれ。

「父は變ることなくまた轉動て顯はるゝ影もなき者なり」―雅各書一ノ十七

出でよ大宗教家

「目は火焰の如く聲は大水の響の如く、兩刃の利劍其口より出で、顏は甚だしく輝く日の如し」靈的修養を積んで世に出でん人は如斯くあらむ、嗚呼世は此人を需む、出でよ大豫言者、出でよ大

宗教家!!

笑はるゝ者愚か

瞑目して靈界に入る、三絃の音を聞くも耳に入らず、美人目に映ずるも心に觸れず、人は我を見て愚とや言はん狂とや笑はむ、笑はるゝ者愚か笑ふ者愚か、面白し〳〵是等は皆人間目前の境涯なるぞかし。

今は修養の時

我れ今、人を救ふの時にあらざるを知る、是れ未だ我心に愛憐の熱情燃へ來らざればなり、我は今修養の時にあり、練達の期に際す、立つて道を說くも人の爲にあらずして我が爲なり、往いて人を敎ゆるも其人の爲にあらずして我が爲なり、我は今多くの人に接して我が心膽を錬り、多くの誘惑に逢ふて我が信仰を磨くの時期にありとす、他日我が信仰成熟せば愛人愛隣の猛火炎炎として我心に燃へ來らん、我れ謹んで其時を待つ矣。

瞑想錄 終

明治四十四年九月廿九日印刷
明治四十四年十月二日發行

定價金壹圓拾錢

東京市小石川區小日向臺町一丁目四十四番地
著作者 村井知至

東京市小石川區櫻木町六番地
發行者 葛岡龍吉

東京市神田區裏神保町一番地
印刷者 龜井忠一

東京市神田區三崎河岸十二號地
印刷所 三省堂印刷部

東京市小石川區櫻木町六番地
發行所 北文館
振替口座東京一四四八四番
電話番町三五八一番

不許複製

早稻田大學講師安部磯雄著

婦人の理想

菊版箱入裝釘美麗
定價金壹圓貳拾錢
並製金九拾錢
郵稅八錢

婦人としての職務を偏重し人間としての發達に多く意を用ゐざる女子教育は根本的に誤れり男子と婦人は便宜上職務を異にすることあれども其體力智力德力を發輝せしむるに當り其機會及權利に於て何等相異のあるべき筈なし故に婦人の理想は出來得るだけ男子と並行して諸能力を開發せしむるにあらざるべからず今や婦人に對する著者の熱烈なる同情は凝つて本書をなす

北文館發兌

海老名彈正著

斷想錄

（近刊）

斷想錄は著者が敎壇獅子吼の餘響也。片言寸句宗敎を論じ、人生を語る、斷想の細漣其轟きや大ならずとするも、よく洋々たる靈海の壯姿を偲ばしめむ。想を言外の妙趣に走せて、遠く連想の興會を恣にせしむるは蓋し斷片の尊むべき所以なり。

北文館發兌

日本女子大學校教授松浦政泰著

奮鬪の偉人

菊版參百拾餘頁
肖像挿畫十葉
定價金九拾錢
郵税金八錢

大阪毎日新聞の評に曰く本書は我國を始め英、米、獨、佛、墺、以、西、嗹八ケ國に於ける實業家、政治家、軍人、科學者、文學者、發明家、探檢家、說教家中の古今の名士三十名を選び其逆境に處する苦戰奮鬪の徑路を記述して現代青年修養の資に供したる者、行文平易流麗宛も新講讀を讀むの觀ありて興味と教訓とを併せ享受するとを得べき近頃有益なる讀物なり

北文館發兌

早稻田大學講師岸本能武太著

英語研究 發音の原理

定價金七拾錢
郵税金六錢

著者が三十餘年の研學と教授の經驗に基き、近時大に進歩せる英語發音學を經とし、又英語の發音に對して特に日本人の感ずる困難を緯とし編成したるもの、ABCの讀み方、母音子音の區別及其發音法、半母音と重母音の發音、語の切り樣、アクセントの性質及び所在等に關し、其要訣を網羅して遺す所なく、親切丁寧に說明したるものなれば、此種の好著殆んど絶無なる、本邦英語學界にありて貴重の寶典たらずんばあらず。

北文館發兌

日本女子大學教授松浦政泰著

英語研究 譯解の原理

定價金參拾五錢
郵稅金 四 錢

本書は著者が多年教授の實驗に基き英語初學者のため、分解法と作表法とにより英文の構造を明瞭に解說し、英語の譯解に一新機軸を出したるものにして、且四百五十餘の練習問題と其解答を附したれば獨修の好指針たること云ふを俟たず、特に高等學校入學受驗の參考書として比類なき良書なり。

北文館發兌

日本女子大學校教授松浦政泰著

譯讀本位 英文典

定價金參拾錢
郵稅金 四 錢

英文和譯に際し初學者の最も苦しむ所は「どの字からどう譯すべきか」の點にして本書は之れが指南車なり讀本編纂に經驗ある某英學大家曰く高等學校入學受驗者に最も必要なるは英文の分解法なりと而して本書は著者が多年教授の實驗によりて大に此點に鑑み取捨編成せるものにして煩を省き要を摘み叙述の順序、練習問題の撰定等最も意を注ぎたる者なれば英學生必讀の書なると云ふまでもなし

北文館發兌

東北帝國大學教授農學博士新島善直著

兒童訓話 もみの小枝

定價金五拾錢
郵稅金六錢

本書は著者が西洋諸國の雜誌及書籍に就て兒童に關する小話を蒐集し平易にして優美なる口語的文體に譯纂せられたる者なり就中對話に屬するものはクリスマスの祝會等に於て兒童によりて實演せられ大喝采を博したる全篇に互りて趣味深き教訓を湛へたる家庭の好讀本なり

北文館發兌

324
467

013590-000-9

324-267

時代思想　付録．瞑想録

村井　知至／著

M44

ABA-0058